
妖怪の妻になってしまった男

小栗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪の妻になってしまった男

【Zマーク】

Z7696Q

【作者名】

小栗

【あらすじ】

今井はひょんなことから、かわいい子ちゃん妖怪のからだを乗つ取つてしまつ。そのまま妖怪の彼の家に連れていかれ、妖怪の妻としての生活がはじまる。なんとか元のからだに戻りたいと頑張るのだが。

1・妖怪ナキータ

今井は名もない古びたお寺や寺院をめぐるのが好きだった。

今日も車をあてもなく走らせていた。

山あいの細い道を進むと、古い鳥居が見えてきた、鎮守があるのだろう。

今井は車を駐め、鳥居につながる古い石段を登つていった。天気はよく風が気持ちいい、石段を登りきると古い古い祠があつた、苔むしていて、かなり痛んでいるが奇麗に掃除されている。

今井はこんな場所が大好きだった。

三方を山に囲まれていて、急な崖の途中に作られたような祠である。

横に岩が置いてあって、岩の正面には『封印』と真つ黒な太い文字で書いてあった。

「なんだろう」

そう思つて触つてみた、ちょうど『封印』の文字が隠れてしまう場所を触つてしまつた。

岩がぐらつと動いた、動くような岩ではないのに。

一瞬びっくりしたが、それ以上は動かない、岩の下に穴が空いている。

今井はその穴を覗き込んだ。

手が出てきた。そして今井の手をつかんだ。

「ギヤー」

今井は悲鳴をあげ、必死に手を振り切つとした、しかし、手はすごい力で今井をつかんで離さない。

穴の中から女がてきた、赤い不思議な着物のよつたものを見ている。

今井は必死で逃げようとしたが逃げられない。

「私は妖怪なの、悪いけど魂をもひりうね」

女がにらむと、自分の口から霧のようなものが出てきた、それが、女の口へ入つていく。

意識が薄くなつてきた。体の感覚がなくなつて体が宙に浮いたような感じだ。

必死に抵抗した。どこかに吸い込まれていく。吸い込まれてなるものかとがんばった。

「おとなしくしろ」

どこかで女の声がする。

おとなしくなんかできるか

意識が吸い込まれそうな感じがするのを、必死でこらえた。

「おとなしくしろと言つて」

女の声

体の感覚がなく目も見えない、意識が薄くなりそうなのを必死でこらえる。

「いかん、こちらがもたん。おまえ法力を持っているのか」

女の声

封印されていた妖怪にはもう体力が残つていなかつた。妖怪は吸い込んだ魂に逆に自分の身体を乗つ取られようとしていた。

「いかん、いかん、私が死んでしまう」

徐々に、吸い込む力が弱くなつた。

しかし、体の感覚はない。今井は体の感覚を取り戻そうと必死で頑張る。

「やめろ、やめてくれ。殺さないでくれ」

女の声は悲鳴に近くなつた。

しかし、今井はありつたけの意識を集中して頑張る。

「ぎやー」

女が悲鳴をあげた。

不意に体の感覚が戻つてきた。

目が見える。が、見えたものは足元に倒れている自分だった。

「俺が、倒れている」

今井は自分の手を見た。白くて細い手が赤くて長い袖から伸びている。身体を見た、何枚も布を重ねたような奇妙な着物を着ている、赤くてケバケバしい模様が目立つ。さつきの穴の中から出てきた女が着ていたものだ。顔を触つてみる、長い髪が手に触つた、長い髪が肩にかかっているのが見える。

自分がさつきの女になってしまった。

これは何なんだろう、あの女の身体を乗つ取つてしまったのか、じゃあ、あの女はどうなったんだろう。さつき聞こえてきた女の声からすると女は死んだのか。

女が出てきた穴を見た、穴の上に大きな岩があつて『封印』と真っ黒な文字で書かれているが、その文字の真ん中、さつき今井が手を置いた部分が消えて元の岩肌が見えている。

さつきあの女は自分の事を妖怪と言つた。あの女は妖怪なのか。その妖怪がこの穴に封印されていて、それを自分が破つてしまつたのだろうか。

ふと、足元に自分が横たわつているのが目に入った。

そう、自分はどうなつたんだろう。あわてて、自分の横にしゃがみ込むと自分の顔を触つてみた。息をしている。

「よかつた」

眠つているみたいな感じだ。でも、眠つているわけではなくて、自分はいまここにいる。目を覚まさしてみようじ、揺すつたりたりいたりしたが無駄だつた。そうだろう、自分は今ここにいるんだから、これで目をさましたら、それはそれで恐ろしい。

身体をねじつたような形で倒れているので、まつすぐに伸ばして仰向けに寝せた。自分で自分を介抱するのは変な感じだ。

今井は自分の身体の横に座つて、これからどうするか考えていた。乗り移つているのなら、自分の身体に戻らなければならない、でもどうやつて。

自分の身体も、このままここに置いておくわけにはいかない、やはり病院か。病院でこんな現象がなんとなるとも思えなかつたが、まずは救急車を呼ぶ方がいいかもしない。

今井は自分の身体から携帯電話を取り出して救急車を呼んだ。ふと思いつて、自分の身体から財布とかキーとか必要な物を全部取り出した。このままの状態が続くのなら、この身体で生活しなければならないかもしね、そのときに必要になる。

救急車が来るまで今井は自分の身体の横に座つてじつと待つていた。

何気なく顔を触つてみた。痩せた感じの顔だ。俺はどんな顔をしているんだろう、さつき妖怪に襲われた時は顔など見ていなかつた。車にミラーが付いているのを思い出して車のところへ行つた。

ミラーで自分の顔を覗いてみると、そこにはすごい美人が写つていた。整つたほつそりした顔はものすごくかわいい、妖艶な感じでうつとりと見とれてしまつ。自分がこんなにかわいいなんて嬉しくなる。いつまで見ていても飽きない。

ただ、着ているものはちょっとひどかつた、着物に似ているがふんわりと広がつておりスカートのようを感じだ。色は薄い赤でその上にびきつい真つ赤で大きな柄がある。

救急車が来た。

今井は救急隊員を自分の身体が倒れている所に案内した。救急隊員はテキパキと動く。今井はすべて本当の事を説明した。しかし、救急隊員は今井の言う事を信じない。

「あなたが襲つたんですね？」

「いえ、妖怪の時のわたしです」

救急隊員はよく分からんと言つよつて頭をかく。

「あなたが襲つたからこの人は氣を失つて倒れたんですね」

「たぶん、わたしがこっちに乗り移つたからだと思います」

「乗り移った？」

彼らはまったく信用してくれなかつた。あまりにも常識がある人はこのような話は絶対に受け入れられないのだろう。

「ともかく病院へ運びましょう」

彼らは今井の身体を担架に載せると救急車に運んだ。

「搬入先の病院はこちらに電話してもらえばわかります」

救急隊員は今井に連絡先を説明してくれた。

救急車は行つてしまつた。

救急車が行つてしまつとあたりは元の静けさを取り戻した。これから、どうしよう。この身体で暮らさなきやならないのか、何とか元に戻る方法を探さなくちゃならない。

さつきの『封印』の岩の所に行つてみた、妖怪女が入つていた穴がある。中に入つてみた。中は狭く人が立てないくらいの高さで畳1枚くらいの広さだ。紙屑みたいなものが散らばつてているがこれといつて何もない。

今井は穴から出た。まわりをふらふいら歩いてみる。

「ナキータ」

不意に空から声がした。声がする方を見上げると何か浮かんでいる、人の形に見えた。

その人の形の物はぐんぐん今井の方へ降りてくる。そして、あつと言う間に今井の前に降り立つた。

それは人間だつた。背が高くがつしりした男で、これまた不思議な着物のような物を着ている。

もう何があつても驚かないが、やはりビックリして数歩下がつた。

「ナキータ、封印を破つたのか」

彼はうれしそうに今井の肩を掴む。

「よかつた」

彼は今井をグッと引き寄せた、今井はこの男に抱かれたしまつた。

あまりに思いがけない出来事に逃げる事をえ思いつかなかった。

「君が封印されてから、毎日来てたんだ」

彼はこの妖怪女の知り合いなのか、ナキータと呼んでいるからこの妖怪女の名前はナキータらしい。彼はいとおしそうにナキータの髪をなる。そしてじつとナキータの目を見つめていた。彼の顔が近づいてきて、キスされてしまった。

今井はすくんでしまって動くことができなかつた。ナキータの目に恐怖の色を見つけ男の顔が変わつた。

「どうしたんだ？」

自分はこの妖怪女ではない事を説明しなければ。そう、思つたが、恐ろしい考えが頭に浮かんだ。ナキータは死んだのだ。その事をこの男に説明したらどうなるだう。確實に殺される。今井は恐怖で何も言えなかつた。

「どうしたんだよ、俺だよ」

彼はナキータの手を持つた。

「俺のこと、覚えていないのか？」

今井は思わずうなづいた。

「覚えていない、わすれたのか？」

もう一度うなづく。これがいい、記憶を失つたことにしよう。

「何を覚えている？」

「何も思い出せない」

今井は小さな声で言つた。

「記憶をなくしたのか」

彼はびっくりしたように今井の目を見ている。

「俺の事とか、家の事とか何か覚えているか？」

「なにも覚えていない」

今井はやつと答えた。

彼はナキータの髪をなでた。

「そうだよな、3年間も封じ込められていたんだもんな、辛かつたよな。もう大丈夫だ、俺がついてる、何も心配しなくていい」

彼の目はつるんでいた。よほどナキータが好きなのだ。

「閉じ込められている間に、記憶をなくしたんだな。辛い生活だつたんだな」

彼はナキータを抱きしめた。

「さあ、帰ろ」

彼は今井の手をつかんで浮き上がった。手を引っ張られて、ナキータは少し浮き上がったが手がすべてどすんと落ちてひっくり返つた。

彼はあわてて、ナキータの横に降りてきた。

「どうして飛ばないんだよ」

「私、飛べるんですか？」

「そうか、飛び方も覚えていないのか」

彼はナキータを軽々と抱き上げ、そしてそのまま飛び上がった。どんどん高く登つていぐ、怖いので思わず彼にしがみついてしまつた。ナキータが彼に抱きついているので、彼はうれしそうだ。どんどん飛んでいく。この妖怪男にどこかに連れて行かれる。彼が行つてしまつまでの辛抱と思つていたが、とんでもないことになつてしまつた。

「君に会いたかった、毎日、君の所に行つていたんだよ」

男はしゃべりはじめたが風の音でよく聞こえないから返事しなくても不自然ではなかつた。

この男も妖怪なのか、どこへ連れていいくつもりなのだろう。今井は元の身体に戻るどころか逃げることもできないような所へ連れていかれつつあつた。

妖怪男は今井のナキータを抱き、野山を越えてかなりの低空を飛ぶ。速度が上がったのか風の音がすごい、だから妖怪男も黙つている。飛びながら見える景色はおもしろかつた。山を低空で飛び越えると平地が眼前に広がる。川が流れていて橋が架かっている。

突然景色が変わった。いきなり雪が積もつた険しい山々が広げる所へ出た。そこは日本とは思えないような所だつた。空中にトンネルのようなものがあつてそこを通過したような感じだ。

今井は景色を覚えた、もし、ここから逃げるときはここへ戻つてこなければならぬ。逃げることが出来れば話しだが。

青空に広がる山々の景色は息を飲むほど美しい。気温が急に下がつて当たる風が冷たい。あちらこちらの山の中腹に赤い家が建つている。どの家もものすごい急斜面に建つてている。

やがて、そんな家の中の一軒が近づいてきた。

家の正面には広いテラスがある、彼はそのテラスに降り立つた。いよいよ妖怪世界のど真ん中に来てしまつた、もづ、記憶喪失のナキータを演じるしか道はなかつた。

「さあ、ついた、ここが僕達の家だよ」

この家は断崖絶壁の中腹に張り付くように建つていて、テラスもかなり恐ろしい所で、まず周囲に手すりがない、板が敷いてあるが隙間が広い所があつてそこから下の断崖が見える。

妖怪男は抱いていたナキータを下ろした。足元の近くにある隙間は人が入るくらい広い、落ちたら終わりだ。

彼はナキータの肩を抱いて歩き出した。今井は彼に引かれて歩く。板の隙間はデザインでこうなつてているみたいで一定間隔にある。なんでこんな危険な構造になつてしているのだろう。

「ここのは、覚えているかい？」

彼がナキータを見る。

「いいえ」

今井は小さな声で言つた。声が出たのが不思議なくらいだった。テラスの先は玄関になつていて。大きな扉があつて、妖怪男はその扉を開けて中に入つた。

中は広い、天井が高くて、大きな窓がある。男の人人がいて妖怪男を迎えた。中年の男性で背が高い。彼も妖怪なのだろうか。妖怪男はナキータの肩を抱いたまま、どんどん奥へ入つていく。やがて、こじんまりした居間のような部屋に入つた。大きなソファーのような椅子が向かい合つて置いてあり、椅子が幾つかある。窓があつて綺麗な山が見えている。

「さあ、ゆつくりして」

彼はソファーのような長椅子に座つた。身体を背もたれに倒して身体を伸ばした。

彼から一番離れた所に椅子があつた。今井はその椅子に浅く腰を下ろした。
「3年間、長かつた、もう君は死んだと思っていた、よかつた、本当によかつた」

彼は嬉しそうだ。

「君も3年間辛かつただろうな、本当によくがんばったよ」
今井はこちこちになつて妖怪男を見つめていた。どう動いたらいいのかまったくわからない、ナキータになりますなんて不可能に思えた。

彼はナキータが固くなつているのを見て、

「こつちへこいよ」と手招きをする。

あまりよそよそしいのも変だ。今井はそつと立ち上ると彼の横に少し離れて座つた。

彼はナキータの腰へ手を回す、そしてぐつと引き寄せた、今井は彼にぴつたりひつついてしまつた。

「ナキータ、もうなにも心配しなくていい、ここはおまえの家だ」

彼は喜んでいるナキータを期待している。それに合わせないとま

「こわがつて いるのか？」
今井は思わずこくんとうなずいてしまった。

「そ うか、記憶がないから、ここが始めての場所に感じるんだな。
それ に俺のこ とも」

彼は座り直した。

「俺は、ゾーディヤ、君の夫だ」

彼はナキータの夫だったのか、それでナキータをこの家に連れて
帰つてきたんだ。

「俺たち結婚して るんだ、使用者が3人いる」

使用者がいるのか、妖怪も人間のような社会なのだろうか。

今井は恐怖で固くなつて いたが、しかし、その恐怖でも我慢でき
ないことがあつた。猛烈にお腹が空いて いるのだ。ナキータは封じ
込められた3年間な にも食べてい ないらしい。最初は空腹を感じな
かつたがナキータの身体になれてくると空腹を感じ始めた。しかも
空腹などとい う生易しいものではなかつた。ゾーディヤはやさしそう
な妖怪な で思い切つて言つてみた。

「あの、ゾーディヤ、なにか食べたいんだけど」

今井は始めて自分から喋つた、もちろん、ナキータを演じなけれ
ばいけないので、女の話し方で話した。

「わかつた、すぐに準備させる、まつて」

ゾーディヤは部屋から出でてい った。

彼がいなくなると、緊張がすこし緩んだ。じちじちになつて いた
身体を少し動かす。これからどうなるのかまったくわから ない。死
刑台の上に立つて板が落ちるのを待つて いる気分だ。ミスをしてナ
キータじやないことがバレてしまつたら、そこで殺される。
ゾーディヤはすぐに戻つて きた。手に果物が入つたかごを持つてい
る。

「少し待つてて、すぐできるから、それまで、これでも食べて」

今井は彼がまだ手に持つて いるかごからりんごを取るとかぶりつ

いた、日がくらむほどお腹が空いていた。

ゾーラの事も忘れて夢中で食べた。あつと壇の間に全部食べてしまった。

お腹が膨らむと少し落ち着いた。やつと笑顔でゾーラを見上げた。

「わらつたね」

ゾーラはうれしそうだ。

「おいしかった」

今井は自分でも驚くほど普通に喋れた。

「もつと持つてこようか」

まだ、いくらでも食べれそだつたが、何かするとそれだけミスをする危険も増える。危険そうな事は先へ伸ばそつ。

「いえ、準備ができるまで待つわ」

女の話し方と思つてゐる話し方で言つてみた。声が女の声なので違和感は感じない。ただ女つて普通どう話してゐるんだろう。すこし違うような氣もする。

「3年たつても君は変わつていない、かわいい」

ゾーラはナキータの髪をなで始めた。

彼が腰をすらしてナキータの横にぴつたりと座つた。逃げるわけにもいかない。

彼はナキータの肩に手を回して引き寄せた。今井はゾーラにぴつたりと寄り添つてしまつた。

脂汗が出てきた。

「君が戻つてきてよかつた、この日をどんなに待つたことか」

彼はナキータの髪にキスをする。今井はじつと耐えていた。

「君がいない3年間は寂しかつた。毎日会いに行つたんだ。でも、君の方が辛かつたよな。あんな狭いところに封印されて」

彼はナキータの髪に自分の顔を埋めた。

「もう大丈夫だよ、これからはここで今まで通りの生活が始まる」

突然、

「失礼します」

部屋の外から声がした。

ゾーニャがナキータを離した。

女性が入ってきた、おつとりとした感じの太ったおばさんだ。

「簡単なものですけど、食事の準備ができました」

使用人なのか、ともかく、これで窮地を脱出できた。

ゾーニャの後について廊下を進む。後ろからはさつきのおばさんがついて来る。廊下を曲がった先の部屋に入った。そこは大きな部屋で天井が高い。部屋の端にテーブルがあった。

ゾーニャはテーブルに行くとナキータに座れと手で合図した。テーブルの上には数品の料理が置いてあった。見たところ普通の料理に見えた。

今井が座ると、ゾーニャは反対側の席に座った。

先ほどの女性がグラスに何かをついだ、多分お酒だ。

料理は田の前にあるが食べ始めていいのかわからない。

ゾーニャを見ると彼はお酒を飲み始めた。

「食べてもいいですか？」

聞いてみた。

彼はびっくりしたように。

「もちろん、さあ食べて」

箸が置いてあるので箸で食べ始めた。料理は普通に食べることができる。何の料理か分からぬがおいしき。

ふと見るとゾーニャがじつとこっちを見ている。俺が何か変な事をしているのかもしぬれ、妖怪の食事の習慣なんて分かるはずがない。

もう一度ゾーニャを見てみた。やっぱり食い入るよつて見ている。

「あの・・なにか変ですか？」

聞いてみた。

「君を見るのは3年ぶりだる、いつまでも見ていたんだ」

そういう事なのか、ちょっとホントする。ナキータはかわいいし、ずっと見ていきたい気持ちも分かる。

しかし、田が上げられない。田を上げるとゾーニャと田が合つてしまつ。ゾーニャに見られてると想つと動きがぎこちなくなつてお箸で料理がうまくつかめない。

「あの・・・あまり見つめないでください」

今井が言つと、ゾーニャはにやつとわらつた。

「今日の君はかわいいなあ。君がこんなに初々しく感じたことはないよ」

「わざとやつてこむ訳ではない、おどおどしてこむところが初々しく見えるのだね？」

ゾーニャはお酒を飲んでいたが。

「酒でも飲んだらどうだ、落ち着くぞ」

今井はお酒は飲めなかつた。それに酒には酒ならではの習慣があることが多い。お酒はやめといた方がよそそつだ。今井はお酒に手を出さなかつた。

「どうした、大好きだらう」

今井はゾーニャを見た、彼はやそしそうな顔でナキータをい見ている。

お酒に手を出さないわけにもいかないみたいだ。お酒をちょっと飲んでみた。かなり強い酒だ。

グラスを置こうとすると。

「なに、気取つてんだ。ぐいっと飲んじゃえよ」

もう一度グラスを手に取つて、ぐいっと飲んでみた。むせて咳をしてしまつた。咳き込みながらグラスを置いた。

「君が酒にてこずるなんて、始めて見た」

ゾーニャはおもしろいをうにナキータを見ている。ただ、疑つているわけではなさうだ。

ふと見ると足を開いて座つていて。まづい、あわてて足を閉じた。

今今までまったく気にしてなかつた。ここはテーブルがあるから

ゾージャから見えないが、わざとゾージャといた時おかしく思われたかもしない。

急にあちこち気になつてきた、今着ている着物はボタンではなく紐で結ぶよつになつてゐる、だから着こなしが難しい。かなり胸がはだけていて、胸のふくらみが見えてゐる。ゾージャが見ていたのはこれかもしれない。あわてて、襟を引き寄せた。

「俺たち結婚してるんだから、そんなこと気にするなよ」「やつぱり、みつともないなと思つて」

自然に言葉が出てきた。ちやんと女性らしく話せた。

髪の毛を触つてみた。指が髪を通り抜けて

「髪はひどいな、あとでミラーで梳かしてもらえばいい」「ミラーついて？」

一度話せるよつになると、どんどん言葉が出てくる。

「君の侍女、君がいない間もずっとここにいるんだ」

「わたしに侍女がいるの？」

明るく振る舞つた方がいいと今井は思つた。あまり怖がつてはいると返つて変に思われる。

「そうなんだ、なかなか気の利く娘だよ」

侍女がいるなんてたいしたものだ。

「ゾージャはお金持ちなんだね」

「まあね」

ゾージャも嬉しそうだ。

今井はゾージャとそれらしい会話が出あるよつになつたので気持ちがずいぶんと楽になつた。余裕が出てきて部屋の中見渡した。壁の途中に扉があつた、なんであんなに高い所に扉があるんだひつ。

「あの、扉はなんなの？」

「あそこから寝室に行ける」

ゾージャは普通に答えた、どいつも不思議とは思つていないようだ。

「なぜ、あんな高い所に扉があるの？」

ゾージャは首をひねつた。

「だつて2階に行ける扉が必要だら、あそこには扉がなかつたりビツ
やつて2階に行くんだ」

「階段・・」

と言いかけて、はつと口をつけぐんだ。彼らは空が飛べるのだから
階段など必要ない。あそこまで空中を飛んで、あの扉から2階に行
くのだ。

さらに恐ろしい考へが頭に浮かんだ。といつ事は、この家には階
段がないのかもしねない。

とんでもない所に来てしまつた。ここでは1人で寝室に行くことも
できない。

ゾーディヤはナキータが何を考えているか分かつたみたいだ。彼は
扉を見上げた。

「飯が終わつたら飛び方の練習をしよう、飛べないと便所にも行け
ないぞ」

「練習?」

今ゾーディヤの言葉は衝撃的だつた。俺が飛べるのだろうか。確
かにナキータの身体なんだから、ナキータが飛べるのなら、飛べる
かもしねない。

「お願ひします」

思わず言葉に力が入つた、空が飛べるのなら飛んでみたい、今井
は始めてここでの生活が楽しそうだと感じた。

食事を続けた。料理はどれもおいしいものばかりだつた。
ゾーディヤは酒を飲みながらナキータを見ている。

今井は次第になれてきた、色々知りたいことがたくさんあつた。
「私、歳はいくつなんですか?」

「君は28、俺は31だ、結婚したのは10年前」

「じゃあ、わたし、18で結婚したんですか」

できるだけ明るく話した。

「18の時の君はかわいかった、この世のものは思えなかつた」

今でもこれだけかわいいんだから18の時のナキータはかわいかつただろうな、今井は思わず笑顔になった。

「笑うと、かわいいよ」

ゾージャもうれしそうだ。

「私、誰に封印されたんですか？」

調子に乗つて次の質問をした。これがまずかつた。

「人間の法力使いにだよ、君は人間の魂を食べに行つて、待ち構えていた法力使いに捕まり封印されたんだ」

「法力使い？」

何だろう人間の見方なのか。

「妖怪は法力にはかなわないんだ、なあ、もう人間の魂を食べるのはやめてくれないか」

急にゾージャの口調は厳しくなつた。

食べるもなにもそんな恐ろしい事できるわけがない。

「はい」

おとなしく答えた。法力使いとは何か知りたかったが聞けそうもない。

ゾージャは不信そうな目で見ている。

「今度のことで懲りただろう、決して食べるなよ」

かなりきつい口調で言つ。

「はい、食べません」

ゾージャが急に怖くなつたので、今井は緊張した。

この話題はまずかつたかもしれない、さっきまでの和やかな雰囲気が一気になくなつてしまつた。

「君は今まで何度もやめると言つてやめなかつた、いいか、今度食つたら俺が殺すぞ」

ほとんど怒鳴る感じでゾージャが言つ。

「はい、絶対にたべません」

怒られているので、今井は箸を置いて、きちんと背筋を伸ばし恭順の表情でゾージャを見て言つた。ともかく従順にしているしかな

い。ナキータはまったく信用がないみたいだ。

「口先だけじゃないのか」

「いえ、本心です」

「今日はいやに、すなおだな・・・、もつべるんぢやないぞ」「はい」

ゾーラは妙な顔をしている。

不審に思っているみたいだ。素直すぎたのかもしれない。本物のナキータはこんなに素直じゃないんだろう。

「君は変わったな、昔の君とは別人みたいだ」

怪しんでいる。本人を知らないんだから真似することが元々無理だったのだ。

「記憶がないからどうしたらいいかわからなくて・・・」

記憶がないことを理由にして、なんとかごまかしてみる。

「今の方がいいな、素直だし」

しかし、むしろゾーラは嬉しそうだ。

「今君の方が、初々しくて素直でだんぜんいいな」

ゾーラはにこにこしてナキータを見ている。

これは、今井にとつて好都合だった。記憶がなくて、しかも、元のナキータと性格の違うナキータがいいと言っているのだ。つまり偽者とバレる心配がなくなると言つことだ。

ゾーラが気に入るようにならうとも従順でかわいいナキータを演じてみせる。今井はそう思った。

「よかつた、ゾーラが気に入つて」

本心だった。

しかし、ゾーラの話しが急に変わった。

「あの、俺、今君の方がいいと思うんだ」

話しくそつだ。

「俺たちの結婚も10年だら、君の記憶がないと、こうも初々しいかと思うと」

彼は頭を搔いた。

「いや、決して君の記憶がない方がいいと言つてるんじゃないんだゾーリヤがなにが言いたいのかわからない。

「あの、実は、あす君を医者の所へ連れて行こうと思つていいんだ」

医者!、妖怪にも医者がいるのか。

「しかし、医者に行つても、記憶が戻るとは限らないゾーリヤは言いにくそうにしている。

しかし、今井は医者が気になつた。医者が診ればナキータの身体を人間が乗つ取つていることが分かつてしまふかもしね。医者に行くのはまずい。

「それで、君さえよければ医者に行くのをよそうかと思うんだ」

彼は汗をかいていい。やつと彼が言いたいことがわかつた。ナキータの記憶が戻るのがいやなので医者に連れて行きたくないのだ。でも医者に連れていかないことで罪悪感を感じている。好都合だ。

「私はいいよ、あんまり医者には行きたくない

ゾーリヤが嬉しそうにわらつた。

「じゃあ、行かなくていい?」

「うん、いいよ」

不思議な同意がゾーリヤとの間でできた。

今井はもともと図太い性格だった。子供のころみんなが怖がつてやらなかつた事を平氣でやつて大怪我をしてことがあつた。その図太さで、ナキータのふりをするのも平氣になつてきた。

食事が終わると、妖術の練習を始めた。

妖怪も子供のころは妖術が使えず、親に教えてもらひ「とこよつて使えるようになるらしい。

基本的な妖術は教えてもらひ「とこよつて誰でもできるようになるが、特殊な妖術は個人差が大きく元々持つている妖力に大きく依存するそうだ。もともとその妖力がなければどんなに練習しても使えるようにはならない。

妖術は精神集中の仕方でいろんな術が使えるようになる。妖術を学ぶとはこの精神集中の仕方を教わることになる。

「精神を集中するんだ、宙に浮いている所をイメージする」

ゾージャは宙に浮いてみせてくれた。

「やつてみろ」

精神を集中してイメージしてみるが浮き上がらない。

「目は右上を見る感じ、でお腹に重い石を抱えて、足を少し曲げた感じでやつてみて」

ゾージャは精神の持ち様を言葉で説明する。

今井がナキータが右上を見ると。

「いや、実際に右上を見るんじゃなくて、気持ちの持ち方、さあやつてみて」

この説明はものすごく分かりにくい、

「どうすればいいのか、ぜんぜんわかりません」

「だから、感覚だよ、頭でイメージするんだ」

やつてみるがうまくいかない。

「手を少し曲げてみて」

ゾージャはナキータの腕を持つて少し曲げる。

「お腹の石はかなり重いやつ、やつての机くら、で左上を見て」

「えつ、右上じやないの?」

「いや、左上だよ、そういうたら

「さつきは右上と言つたよ」

ゾーディヤの説明は毎回微妙に違う。

「それで、体を少し前かがみで」

妙な姿勢になつた、からかわれているのかもしない。

「ゾーディヤ、からだの形つてそんなに微妙なの?」

「ああ、大事なんだ。それで、足はもう少し開いて」

言われたとおりにする。

「それで、石を抱えている感覚で、さあ、やつてみて
やつてみると、足が床からすつと離れた。

「浮いた」

今井は思わず叫んだ。

「できた、できた」

今井はゾーディヤを見た。彼もうれしそうだ。彼の指導は、あながちデタラメではなかつたみたいだ。

一旦浮き上がるようになると、飛ぶのは簡単だつた、宙を移動してみる。そう思つだけで思う所に移動できる。

ちょうど水中を泳ぐような感じでテーブルの下をぬけてみた。天井まで登つて天井に腹ばいになつて天井板をたたく。

ゾーディヤが横に飛んできて一緒に天井に腹ばいになつた。ナキータが天井をたたくとゾーディヤもたたく。二人で大笑いになつた。

今井はうれしくてたまらない。部屋の中を飛び回るビゾーディヤがそれを追いかけた。

食堂を飛び出して家中を飛び回りながら鬼ごっこが始まつた。ナキータは台所、広間などを笑いながら逃げまわつた。ゾーディヤが追いかけてくるがきわどいところでかわして逃げる。納戸の天井で逃げ場がなくなつてゾーディヤに捕まつた。

ゾーディヤはナキータを捕まえるとぐつと抱きしめた。そしてキスをした。

今井も、そんなに嫌がつてはいられない。毒食らわば皿までだ。

今井はゾーニャにキスを返した。

ゾーニャはナキータを抱きしめたまま一人は宙に浮いていた。

彼はナキータの目を見つめている。

「ナキータ好きだ」

彼はキスをした。いつまでたつてもキスをやめない。手はナキータの体をさわり始めた。来るときがきた。我慢しなければならない。ゾーニャは唇や耳にはげしくキスをする。男にキスされるのはやはり気持ち悪い。今井は我慢してじつと耐えていた。

ふとゾーニャを見ると彼はナキータの目をじつと見ている。

彼はナキータを抱きしめていた手を緩めた。

「俺を警戒しているのか？」

今井の困惑の気持ちがナキータの目に出でていたのだ。

「いえ、あの、何も覚えていないから、いきなりこうなっちゃうと…」

彼はしばらく黙っていたがナキータを抱いて床に降りた。

「そうだろうな、わかった。君がもつと慣れるまで、待つよ」

ゾーニャはやさしい男だ。待つてくれた。

…

幸いなことに、ナキータの部屋があつた。

今井は自分の部屋に入った。一人になると、やつと演技から開放され、疲れがどつと出てきた。しかし、とりあえずここで生活していくめどがついた。空も飛べるし、そこそこ楽しめるかもしけない。落ち着いて部屋を見てみた。広い部屋で家具がたくさん置いてある。ガラス戸があつてその外はテラスになつていた。

テラスに出てみた。

すばらしい景色だ。山々が夕日を浴びて赤く染まっている。

テラスには手すりがない。テラスの端に立つて下を見ると断崖になつていて足がすくむ。ここに手すりがなく板の隙間も広いのは彼らが空が飛べるからだ。彼らには落ちるという概念がないのだ。

山々には転々と赤い家が建っている。ここみたいな妖怪の家らし

い。彼らは空が飛べるので平地に密集して住む必要がないのだ。だから景色がいい山の上に住んでいいのだろう。

すうと浮き上がつて家から離れてみた。テラスを越えると足元に断崖が広がる。思わず身がすくむ。空が飛べるという理性とは別の所で高さに恐怖を感じる。離れるにつれて家の全体が見えてきた。急な山の斜面に家が建っている。よく落ちないなと思うような場所だ。家は奥行きが少なく、正面にたくさんの中屋があつて、すべての部屋から景色が見えるようになつている。

今井は部屋に戻ってきた。大きなベッドが置いてある。人が5人は寝れそうな大きなベッドだ。横には鏡台があつたので、前に座つてみた。

始めて等身大で自分の姿を見た。信じられないくらいかわいい。あどけないところがあつて年齢よりはるかに若く見える。10代と言つてもいいくらいだ。その一方で妖艶な色氣がある。あどけない目をしているのだが鋭い所がある。

微笑んでみた。鏡の中のナキータが今井に微笑む。微笑んだ顔はまた格別にかわいい。

今度は鋭い目で見つめてみた。鏡の中のナキータが今井を鋭く見つめている。鋭い顔もまたかわいい。

いつまでやつていても飽きない。今井は28才で彼女はいない、こんなかわいい娘に微笑みかけられたことなどない。でも、彼女はいくらでも好きなだけ微笑んでくれる。

「失礼します」

今井があほなことをやつていると、廊下の方から声がした。扉が開いて、女性が入ってきた。清楚な感じのするすらつとした美人だ。

「ナキータ様、お帰りなさい」

「どなた?」

「私は侍女のミリーといいます、ナキータ様のお世話をいたします」
彼女はつこり微笑む。

さつきゾーディヤが言っていた侍女だ。彼女は理知的でその目からは強い性格を感じた。少しあつとりした所があるゾーディヤと比べて彼女の方がだますのは難しそうだ。すぐにナキータでないと見破つてしまふかもしない。今井は緊張した。

「あの、ナキータです、よろしくお願ひします」

自然と丁寧な挨拶になつてしまつた。

「いえ、私は侍女ですから、そのように丁寧にされなくともいいですよ、それに、ナキータ様が封印される前からお仕えしていますから、存じ上げています」

「すみません、なにも覚えていないんです」

「お着替えされませんか？」

ミリーは聞く。

「着替える・・・なんと着替えるんですか？」

「失礼ですけど、その着物かなりすりきれています」

自分の着てている着物を見てみた。確かにこれを3年着ていたはずだ。袖を見るとすりきれてぼろぼろになつていて

「ああ、じゃあ、そうしよう」

話し方が難しい、相手は使用人だから少しいばつた感じで、しかも女の話し方で話す。

ミリーは扉を開けてどこかに入つていく。彼女について入つてみるとそこは納戸だった。

たくさん着物が着物掛けに掛けられて置いてある。ものすごい量だ。

「どうです、これ、全部ナキータ様のお着物ですよ」

ミリーはさぞナキータが喜ぶだろうと思って言つ。

今井はまわりを見回した。女ならこれだけ着る物があつたら嬉しいのだろうが、今井はまったく興味がなかつた。

「どれになさいます」

着るもの選びが一番楽しいといった雰囲気でミリーが手を広げた。しかし、こんなにあると選ぶのは大変だ。

「ミリーはどうがいいと思つ」

「では、これなんかいかがですか」

ミリーは落ち着いた柄の着物を取り出した。悪くない。いい柄だ。
「ああ、では、それで」
今井はミリーが指示する通りに動くことにした。その方が無難だ。
なにか聞かれた時も逆にミリーに聞き返してミリーの言う通りにすればいい。

着替えが始まつた。ミリーにどんどん脱がされていく。

携帯電話とか財布はナキータが持つていた袋に入れて首から下げてある。これだけは自分で外してベットに置いた。

全部脱がされて素っ裸になつてしまつた。ナキータの裸が見える。なんかはずかしいようなうれしいような気分だ。ナキータはすばらしい身体をしている。胸も大きかつた。

次は着なればならないが、妖怪の着物は紐がたくさんあつてどう着ればいいのかわからない。まるで子供のよつてミリーに着せてもらつた。

「はい、完成です」

ミリーはナキータを鏡の前に連れていく。

鏡に写つたナキータはそれはかわいかつた、着物がよく似合つ。この着物は帯や紐を使って着るのだが、日本の着物とかなり違つ。ふつくらとした感じになつていて長い袖がある。

今井は袖を振つてみた、鏡に写るナキータの袖がかわいく動く。こんなかわいい着物が着れるなんて女も悪くない。今井は始めて自分を着飾る楽しさがわかつてきた。

うれしそうなナキータを見て、ミリーも笑顔を見せた。

「お記憶がなくて、さぞ不安だと思います。わからないことは何でも私にお尋ねください」

なんと答えたらいいか分からない。

「ありがとう」

と言つてみたが、どこかピント外れだ。

「私はナキータ様がゾーディヤ様と結婚された時からお仕えしています。だから、私には何を話されても大丈夫ですよ」

ミリーはナキータが必要以上に緊張しているのを感じ取つたのかもしれない。

しかし、これにもなんと答えたらいいか分からない。

「ありがとう」

と言つてしまつた。間の抜けた返事になつてしまつた。

「もう、人間界には行かれない方がいいと思ひます」

お茶の準備をしながらミリーが言つ。

人間界とは今まで今井が住んでいた普通の世界のことらしい。だいたい、ここは何なんだろう地球上のどこかなのか、それともぜんぜん違う所なのだろうか。ここは何なのか聞いたかつたが、彼らからすればここが普通の世界だろうから、逆に聞いた方がいい。

「人間界つて、私が封印されていた所のこと?」

「そうですよ、怖い世界です」

怖いとはどんな認識なのかわからないが、それは置いといて。

「人間界つて、ここと何が違うの?」

ミリーは説明のためにちょっとと考えた。

「もちろん人間が住んでいる世界です。人間界は自然に出来た世界です。はるか昔から人間や妖怪が生まれる前からある世界なんですよ」

これで説明は終りと言つようにミリーはナキータを見た。

「これでは肝心の、ここJの世界のことがわからない。

「ここは違うの?」

「ここは私たちが結界で作つた世界です。昔は私たちも人間界に住んでいたんですよ。それが結界世界を作つて私たちはここに住むようになつたんです」

なるほど、すごい話だ。自分たちで自分たちの世界を作つてそこ

に住む。自分たちで作った世界なら公害も自然破壊もなにも心配ない。

ミリーはかいがいしく世話を焼いてくれる。今井は1人になりたかつたがミリーはなかなか部屋から出ていかない。

小さなテーブルがあつて、今井はそこに座つてミリーが入れてくれたお茶を飲んでいた。

ここからは窓の外が綺麗に見える。夕暮れの山々がまだ明かりが残つて、空を背景にそそり立つていて。

「暗くなつてきましたね、明かりを点けましょうか?」「明かり、ここに電気があるのだろうか。

「ええ」

今井が答えると、ミリーが手を動した。すると天井全体が明るくなつた。電気の照明とちょっと違う感じだ。

「どうやつているの?」

「発光の妖術です」

ここはなんでも妖術で出来てしまつらしい。明るくなつたが、やはりミリーはナキータの横にじつと立つている。

「お菓子でもお持ちしましょうか?」

ミリーが聞く。

「いえ、いいわ」

今井は1人になりたかつた。もう緊張は限界に来ていた。しかし、ミリーはナキータの横にじつと立つていて。

ナキータから下がるよう指示しないとミリーが自分から出て行くわけにはいかないのかもしれない。

「あの、ちょっと疲れたんですが

言い方が難しい、今井は意味不明のことを言つた。

しかし、ミリーはすぐに意味がわかつた。

「お一人になりたいんですね」

〃コーは頭を下げる。扉から出て行きかけたが、ふと立ち止まつて。

「私が邪魔な場合は遠慮なくそいつおっしゃて下さー。私は侍女です。遠慮なんか必要ありません」

そう言って彼女は扉を閉めた。

やつと一人になれた。

ベッドの上に横になった。緊張から開放されて身体の筋肉が緩んだ。

これからは事を考えていたが、いつの間にか眠ってしまった。

次の日の朝、田を覚ますと、今ビニールのか思い出のこじほらく時間がかかった。

昨夜は布団の上に横向きに眠つたはずだが、けやんと布団の中に寝ていて着ているものも一番上のかさばるものは脱がしてあつた。

ベットの横は窓で、窓からは綺麗な山々が見える。

今井はベットから降りて、テラスに出てみた、冷たい風が気持ちいい。

朝日がテラスに当たつている。ここが人工の世界だなんて信じられない。日の当たる所まで行つてみると確かにぬくもりを感じる。この太陽も作り物なんだろうか。空は高く白い雲が浮かんでいる。部屋にもどるとミリーが来ていた。

「おはよ〜」

ミリーはお茶の準備をしている。

「昨日、寝かしてくれたのはあなた?」

「はい、ぐっすりお休みだつたので、そのままお寝かせしておいた方がいいと思つて」

「ありがとう、寝るつもりはなかつたんだけど」

昨日に比べると、格段に慣れていた。考えなくとも自分がナキータのつもりで話していた。

「どうぞ」

お茶の準備が出来ていた。ここでは朝起きるとお茶を飲む習慣らしい。今井はテーブルに座つた。

こんな事を聞くと不審に思われるとは思つたが、ここは世界のことがどうしても聞いてみたかった。

「あの、太陽も結界世界で作つたものなの?」

ミリーは不思議そうな顔をする。

「単に結界の外の世界が見えてるだけです」

あつさり説明されてしまった。

洗面所で顔を洗つて、鏡の前に座つてミリーに髪の手入れをしてもらつた。

櫛がなかなか通らない。ミリーは丁寧に櫛で梳いてくれた。着物はミリーに選んでもらつて、ミリーに着せてもらつた。

「昨日ゾージャが言つていたんだけど、『法力使い』て何なの?」着物を着せてもらいながら聞いてみた。

「人間の中に法力を使える人がいるんです。妖怪は彼らの法力にはかないません」

「それに私が捕まつたの?」

「そうです。法力はくもの糸のように身体を縛め上げてくるそうです」

きのうより着付けが大変だつた、着付けが終わると鏡の前に行つた。

鏡にはかわいいナキータが写つていた。綺麗なふわつとした着物を着て嬉しそうにわらつてゐる。鏡が大好きになつてしまつ。

「ミリーあなたのセンスはすばらしいわ、これ大好き」演技ではなくて本氣で言つていた。

「ありがとうございます」

ミリーはナキータの着物の後ろを直している。

「今日はお医者さまの所へいきますから、記憶が戻るかもしれませんね」

なにげなくミリーが言った。

「いえ、ゾージャは行かないと言つてたわ」

今井は深く考えず答えた。

ミリーはビックリしている。

「そんな、お医者さまの所へ行くべきです」

「でも、ゾージャは記憶が戻らない方がいいそうよ」ミリーは手を止めた。

「ゾージャ様がそんなことを・・・」

「どうしたの？」

ミリーが黙つてるので今井は振り返つた。

「ナキータ様、私がお医者様の所へお連れします」

ミリーは本気でナキータの事を心配してくれる。本来だつたら医者にいくべきだらう。しかし、医者はまずい、行くわけにはいかない。

「でも、ゾーディヤはこのままがいにって言つているし」

「ゾーディヤ様にはナキータ様の記憶がない方が都合がいいんですね」

ミリーは奇妙な事を言つ出した。

「どうこう」と？

しかし、ミリーは黙つてゐる。

「記憶がない方がいいって、どう言つこと？」

「すみません、使用人のぶんざいで言つすぎました、お一人の事に口出しそうべきではありませんでした。でも、記憶がない方がいいからつてお医者様に連れて行かないのはあまりにひどすぎます。許せません、私がお医者様にお連れします」

ゾーディヤとナキータの間にはややこしい関係があるのかもしれない。しかし、問題は医者だ、医者には行かない事をミリーに納得させなければならない。

「私は何も分からないから、今はゾーディヤに頼るしかないの、だからゾーディヤの言う通りにするわ」

苦しい言い訳をした。

「ゾーディヤ様にだまつて行きましょう、わかりやしません」

ミリーはナキータを必死で見つめている。絶対に連れて行くと決心しているようだ。

「ミリー、わたしあはゾーディヤの妻よ、だから、ゾーディヤの言う通りにする」

今井も、妻たる者にとって当然の事だと言わんばかりに言つた。ミリーは困つたような顔をしていたがしぶしぶ引き下がつた。

着替えが済んだら食堂に向かった。廊下を進むと扉がある、昨日の壁の途中にあつた扉だ。

扉を開けた。ちょっとした張り出しがあるだけで下を見ると怖い。精神を集中して浮き上がり、そのまま宙に飛び出した。ここは上下に移動するための空間なのだ。この家にはこのような空間が何ヶ所かにある、ちょうど上下方向の廊下みたいなものだ。今井はゆっくりと下へ降りた。

ゾーリヤはもう来ていた。

「おはようございます」

今井は昨日の席に座った。

「眠れた？」

ゾーリヤが聞く。

「ええ、ぐっすり」

「その着物かわいいな」

ゾーリヤが言つ。

彼に褒められるとなぜかうれしい。

今井は袖を動かしてゾーリヤに見せた。

「これ、ミリーが選んでくれたの」

今井はできるだけ愛想よく言つた、ゾーリヤの機嫌を損ねたくな
い。

「それ、始めて見るな、そんなにかわいいの持つていたんだ」

「かわいいと思う？」

「おまえ、確かに変わったな、以前はケバケバしいのばかり着てい
た」

「きのう着ていたようなの？」

きのう着ていた着物はどきつい赤で今井もあまり好きじゃなかつ
た。

「これからはゾーリヤが好きなのを着るね」

今井はかわいいナキータの演技を楽しめるようになつてきた。

食事を始めた。簡単な料理だが今まで食べたことがないようなものばかりだ。着るものといい、食べ物といい妖怪独特の文化を作り上げている。

ゾーディヤは嬉しそうにナキータを見つめている。

「君は変わったなあ、まるで誰かが乗っ取っているみたいだ」

今井はぎくりとした、しかし、ここであせるとまずい。

「乗っ取るなんて、そんなことがあるの？」

平静を装つて聞いた。

「他人の身体に自分の魂を送り込むんだ、相手が弱ければ乗っ取れる」

「相手はどうなるの？」

「死ぬさ、同時に一つの魂が一つの身体には存在できない」

思わず所から乗っ取りのことが分かつてきただ。もつと知りたい。

「元の自分はどうなるの？」

「眠ったようになる。ここが弱点なんだ。乗っ取つている間に自分の身体を殺されると、乗っ取り先の魂も死ぬ。だから自分の身体を結界に入れて絶対に安全にしてからでないと乗っ取れない」

「どうなのか、じゃあ戻るにはどうするんだろう。

「乗っ取つて、元の身体に戻れるの？」

「もちろん、魂を自分の身体に戻せばいい」

「なるほど、確かにそうだ、それが自分にできるのだろうか。かなり危険な質問だがどうしても聞いてみたい。」

「わたし、魂を扱う妖力は持っているの？」

「妖怪世界で君の右に出る者はいないな、魂に關しては君はすごい妖力を持っている」

よかつた、これで問題が解決だ。自分でナキータの中の魂を自分の身体に戻せばいい。

ゾーディヤはナキータをしげしげと見つめた。

「まあ、君が乗っ取られるようなへマをやるはずないな」

「あたりまえでしょ」

今井は勝ち誇ったように言つた。元に戻る方法がわかつた、それも誰の助けも借りなくて自分で出来そうだなのだ。

いつやつて妖怪の妻としての生活がはじまつた。

数日が過ぎた。

ここ的生活ににもずいぶんと慣れてきた、ゾージャとも普通に話せるし、ナキータの演技も演技しなくてもできるようになつてきた、妖怪の妻として一生を過ごしてもいいとさえ思つくらいになつた。今井はほとんどの時間をゾージャと妖術の練習をして過ごしていた。たくさんの妖術が使えるようになつた。

その一方で、この家の雑用が発生し始めていた。

「金はここに入つているから」

ゾージャが金庫みたいな箱を指差す。

「いきなり、金の事を言わわれても意味がわからない。

「お金？」

「そろそろ出入りの業者の支払いの時期なんだ。俺がいない時は君が支払ってくれ」

なるほど、彼の妻のだから、そういう仕事はやらなければならないかもしねない。

「おまえ結界の妖術は使えたよな」

今井は結界の妖術は習つていた。ここでは鍵に相当するものが結界なのだ。家にも部屋にも結界で鍵を掛ける。そして結界は結界を張つた妖怪でなくても呪文で開閉ができるようになつっていた。妖力の弱い妖怪が掛けた結界は強い妖怪に破られてしまうので、強い妖怪が結界を掛けておき普通は呪文を使って開閉する。ゾージャは非常に強い妖力を持っていて、ナキータもそこそここの妖力を持つていた。これがミラーになるとかわいそなぐらい弱い妖力しか持つてない。

「まつて、今思い出すから」

たくさんの妖術を習つたから、いきなり実地試験が始まると思い

出すのにちょっと時間がかかる。

今井は練習のときにしたような小さな結界を作つてみた。

「できた」

「よし、じゃあ、この金庫の結界の呪文は××××××××だ。解いてみる」

ちょっと緊張する。出来なかつたらまたゾーニャにバカにされる。やつてみたが、金庫の結界はびくともしない。

「違うだろう」

ゾーニャが頭を振る。出来ないとゾーニャはバカにするが、数日でこれだけの妖術を覚えたのだ。そつちを評価して欲しい。

「どうやるんだっだけ？」

女はこういつときに得だ。出来なくても、むしろかわいく見える。

「こうやるの」

ゾーニャは教えてくれた。とりあえず金庫の結界は開けることができた。

ゾーニャが中からお金を取り出した。紙幣だ。妖怪の世界も人間の世界とほとんど同じみたいだ。彼は紙幣の種類を説明してくれる。で今井はそれをメモに書き留めた。もうメモにはびつしり書き込んである。彼らの言葉は日本語なので文字も日本の文字だ。

今日はゾーニャは機嫌がいい。金庫の結界を掛けた所で、今井はもう一度魂を扱う妖術の話を持ち出してみた。今まで何度頼んでもゾーニャは教えてくれないので。

「ゾーニャ、お願い、魂を扱う妖術を教えてくれない？」

ゾーニャは厳しい顔になつた。

「その妖術は知らない方がいい」

困つた、魂を扱う妖術が出来ないと元の身体に戻れない。

「お願い、教えて」

「魂を扱う妖術で何をするつもりだ」

「私の魂を扱う妖術は強力なんでしょう。それなのに扱えないのは納

得できなくて

毎回違う口実を言つて いるのだが。

「あれは、人間の魂を食べる以外に使い道がない、知らなくていい

「絶対に、人間の魂は食べないつて約束する」

ゾージャは怖い顔でナキータを見た。

「だめだ」

「もし食べたら私を殺していい」

絶対の決意を言つたつもりだったが。

「なに、アホなこと言つてる。俺がお前を殺せるはずないだろ」
困った、このぶんだと魂を扱う妖術は絶対に教えてくれそうには
い。それが分からないと元の身体にもどれない。まだ当分ここにい
なればならないのか。

ゾージャがいない時は、空を飛んで楽しんでいた。

ここへ来て一番よかつたことは空が飛べることだ。青い空の中に飛び出して行く。高い所まで上がると遠くまで見える。山々が連なり、遠くの山は霞にかすむ。低く降り、険しい岩肌にそつて飛ぶ。尾根を飛び越えると、眼前に雪山が広がる。冷たい風を切って飛ぶ。雲が山を越えていく、その雲の上を雲と一緒に飛ぶ。今井は楽しくて楽しくて仕方なかつた。

飛び疲れると、岩場に降りて景色を楽しむ。岩の隙間に草が生えていて小さな花が咲いていた。

花を見ていると、

「ナキータ」

不意に男の声がした。

見ると、精悍な感じの男が立っている。ゾージャよりは痩せているが筋肉質の体はゾージャよりたくましい。

「いつ、出てきたんだ、知らなかつた」

ナキータの知り合いらしい。ここでは、どうしてもこの問題が起きる。知っているはずの人に会つた時困る。

男は近づいてくる。なんか、ヤバい感じだ。

彼はナキータの体に手を回そつとする。今井はその手を振り払つた。

「どうしたんだ。ナキータ、いやなのか

今井はうなづいた。

「なぜ、3年ぶりだぜ。やつと出られたんだろ？」

彼は親しそうに話す。

「ナキータ」

またすり寄つてきた。腰に手を回そつとする。今井はその手を押し戻した。

「なぜだ。いつも、お前のほうから来てたじゃないか」「ナキータは浮氣していたのか。

男はどんどん近づいてくる。後ろに逃げ場がなくなつた。

「ナキータ。お前が好きなんだ。なあ、じらすなよ」

この男は、あまり感じがよくない。確かに、ゾージャの方が誠意が感じられる。

「ゾージャがいます」

今井はやつと言つた。

男は笑つた。

「ゾージャ、あいつがなんだつてんだよ、あいつに義理立てするお前でもないだろ！」

男はナキーの腰に手を回した

「ゾージャがいます。いやです」

「ゾージャはきらいだつて、言つてじやないか。ゾージャとはわかれりつて」

男は力ずくでナキータを抱きしめる。

今井は、どこかで、この体をゾージャのために守らなきやという気になつていた。しかし、力ではとてもかなわない。組み伏せられ。地面に横になる。

飛ぼう、今井は妖力をつかつて飛び出した。

男の手を逃れ、上に向かつて飛んだ。後ろを見ると、男が追つてくる。ぐんぐん追いつかれる。今井は必死になつて全力で飛ぶ。後ろを見ると少しづつ男を引き離している。そのまま頑張つて飛んだ。追いつけないとわかつたのか男は諦めて、引き返していった。

今井は自分の部屋に戻ってきた。息が荒くなつていた。こわかつた。

窓をぴしゃと締め、椅子に座つた。

納戸からミリーが出てきた。ミリーは納戸の片付けをしていたのだ。

「どうされたんです？」

「へんな男に襲われて、怖かつた」

「大丈夫でしたか、お怪我はありませんか？」

「大丈夫、怪我はないわ」

人間の世界もそうかもしぬないが、女が一人でひとけのない所へ行くのは危険なのだ。男の時は考えもしなかつたことだ。

「どんなやつでした、訴える方法もありますよ」

「それが、少し変なの、私と付き合っているような事をいつのミリーの表情が変わった。

「もしや、マドラーさんではないですか？」

「マドラー？」

「ナキータ様の浮氣のお相手です」

ミリーはちょっとと言いにくそうに小さな声で言った。

今井は驚いた。

「わたしの浮氣をあなたが知っているの？」

ミリーはうなづいた。

「ゾーディヤ様もご存知です」

今井はあきれてしまった。この浮氣はとんでもない事態になつて

いるのかもしぬない。

「じゃあ、ゾーディヤはなんと言つているの」

「おー一人は喧嘩が耐えませんでした」

そうだろうな。浮氣が見つかったら大事だ。

「最近では、ゾーディヤ様に浮氣を隠さなくなつてきて、ゾーディヤ様との関係は最悪です。ナキータ様はもうゾーディヤ様と分かれたがつてているのですが、ゾーディヤ様はなんとか元に戻したいとお考えです。ゾーディヤ様がナキータ様の記憶がない方がいいと言つたのは、この事です」

それでゾーディヤは性格の変わったナキータをあんなに喜んでいたのか。ナキータが封印される直前は喧嘩別れ寸前だったに違いない。それが、こんなにゾーディヤを慕うようになったのだから彼にとつて

願つてもないことだつたのだろう。しかし、どうしたらいいだろう。

まさか、ナキータのややこしい愛憎関係を引き継ぐ訳にはいかない。

「ミコー、私はこの事は知らない事にするわ」

「マドラーさんはどうされるんです」

「断るわ」

「私もそれがいいと思います。ただ、断り方には注意して下さい。一時、決闘になりかかったんです」

「決闘！」

「幸いなことに肝心のナキータ様が封印されてしまつたので、この決闘はお流れになりました」

これだけかわいいと男が私を取り合つて決闘までするのか。

「わかった、注意して話すわ」

そう言つたものの、決闘を防ぐよくなつまに話し方などできる自信などない。ナキータが残したとんでもない愛憎関係を引き継がざるを得ないのかもしれない。

「お酒でもお持ちします」

ミコーはお酒の準備を始めた。男に襲われて興奮しているのでお酒がいいと思つたのだろう。

今井はふと魂を扱う妖術の事を思い出した。ひょっとしたらミコーは知らないだろうか。

「ミコー、あなた魂を扱うことができるの？」

「その妖術は知らない方がいいと思います」

ゾージャと同じ事を言つ。まだ、教えるとも何とも言つていないので。

「食べないわよ

ちょっとムカッとする。

「で、知つているの？」

「幸いなことに知りません。私のような弱い妖怪には魂は扱えませ

ん

ミリーはお酒を持ってきた。

ちょっと口をつけてみた。強いお酒だ。

「ナキータ様のは『病氣』です、『自分ではどうにもならない』んです。だからその妖術はできない方がいいんです」

ミリーの目は真剣だ。たぶんミリーの方がゾージャよりも難攻不落だらう。ミリーに頼むのは無理だ。それに本当に知らないのかもしない。

今井はもう一つ知りいことがあった。人間界に行く方法だ。ここに来るときに通つた所が妖怪世界と人間界の入り口になつてゐることは間違ひない。場所を覚えているから行く事もできる。しかし、入り口には必ず結界が張つてあるはずなので結界を開く呪文がいる。「ミリー、あなた人間界に行つたことある

「はい」

よかつた、行つたことがあるなら呪文を知つてゐるはずだ。

「出入り口の結界の呪文はなんというの？」

できるだけ、何食わぬ顔で聞く。

「人間界には行かれない方がいいと思います。法力使いが・・・」
ミリーはナキータのためを思つて言つてゐるのだろうが、これではどうちが主人かわからない。

「ミリー」

今井はいらいらしてきてミリーの言葉を遮つた。

「あなたの言いたいことは分かつたから、呪文を教えて」
ここに来たときにびくびくしていたのが嘘のようだ。腹がたつて、
きつい口調で言つた。

「人間界に行かれるんですか？」

「私はみんなが知つてゐる事を知つておきたいだけ」

ミリーはちょっともじもじしていたが。

「わかりました。呪文は×××××××です」

ミリーはナキータの機嫌が悪いので、緊張している。

「ありがと、封印された穴に忘れ物をしたから取りにいくだけよ」「お気をつけて下さい」

ミリーはナキータの横にじっと立っている。なにか言わないと気がまずい雰囲気だ。今井はお酒をぐいっと飲みほした。

「もういっぱいちょうどい」

「はい、ただいま」

今井は自分の身体がどうなつたか心配だつた。ゾーディヤの説明では、乗つ取りをするときは自分の身体は結界に隠しておくと言つ、自分の身体が一番の弱点なのだ。その身体の安全をどうしても確認したかつた。次の日、様子を見に行くことにした。

ここに着物では人間世界では目立ちすぎる、納戸にはナキータの人間の服が何着かあつたのでそれを着ることにした。ナキータの服はものすごいミニスカートだ。女装のような感じで、どきどきしながらミニスカートをはいた。ブラウスもキチキチで胸が目立つ。この着物も女性用を着ているのだが元々女性の着物との意識がないから女装の感覚はない。

テラスへ出ると青空に向かつて飛び出した。ここへ来た時にゾーディヤが飛んだコースを逆向きに地形を思い出しながら飛んだ。途中何度か迷つたが、ついにここだと思える場所に着いた。ここに人間界への入り口があるのだ。直径が数メートル程度の結界があつた。妖術を習つたから結界が分かるようになつたがここへ来るとときはぜんぜん気がつかなかつた。呪文で結界を開いて通りに抜けると景色が変わつた。そこは平地で川が流れついて橋があつた。人間界だ。

今井は携帯電話を取り出して救急隊に電話し、自分が入院した病院を教えてもらつた。

そこは総合病院だつた。町の中の病院で10階建てくらいの建物が2棟建つてゐる。まず、人目には着かない場所に降りて歩いて病院に向かつた。綺麗な病院だ。中に入ると広い待合室があつて大勢の

人がいる。受付で今井の名前を言うとすぐに入院している病室を教えてくれた。病室は4階だつた。

病室に入ると、そこは一人部屋で窓側のベットにいた。

鼻にチューブを通して眠つている。とりあえず大丈夫そうだ。今井は椅子を持ってきて自分の横に座つた。こうして自分を見つめるのは不思議なものだ。

そつと布団をかけてあげる。

「あんた、その人の彼女？」

隣のベットの人が聞く。

「いえ、ただの友達です」

「長い付き合い？」

「まあ、そんなもんです」

軽く受け流す。

彼はちょっと咳払いをすると。

「その人なあ、わしは妖怪に魂を吸われたんだと思うんだが」

今井はびっくりして振り返つた。

隣のベットには老人が座つていた、白髪を短く切つた瘦せた小柄な人だ。

「驚くのも無理はないが、妖怪は本当にいるんじや」「この人妖怪の事を知つているのか。

「ナキータという妖怪があつてな、人の魂を食べよる。そのナキータがな、数日前に封印を破つて逃げ出したんじや、しかもその場所でその人が倒れていた。まず、ナキータにやられたんだと思う」

今井はまじまじと老人を見た。

「あの、どなたなんですか？」

「ん、わしは法使いじや、法力で妖怪から人間を守つておる

「法力つて？」

「妖怪をやつつける力じや、人間には1万人に一人くらい法力を持つたものがある、それらが集まつて妖怪と戦つておつてな、わしもその一人じや」

ゾージャ言つていた話だ、ナキータを封印したのもこの人達だ。
「じゃあ、彼を助けることも出来るんですか？」

今井はベットの自分を見た。

老人は首をふった。

「無理じゃ、その男を助けたかつたらナキータに頼むしかない」
ナキータは自分なんだが。

「もう一度ナキータを封印する。今度は逃さん」

老人は気になることを言う。

「どうやって封印するんですか？」

「なに、今大勢の法力使いが集まつてある。法力を集めてナキータを引きずりだし元の穴に封印する」

恐ろしい話だ。これが本当なら自分は封印されてしまう。

「ナキータがもう人間を襲わなくなつても封印するんですか？」

思わず不自然な質問をした。返事しだいでは、本当の事を説明して封印をやめてもらわなければならない。

「ばかな、ナキータじやぞ。何人殺したと思つている。改心してももう遅い」

ナキータは人間にものすごく恨まれてゐるらしい。このぶんだとナキータの中身は人間だと言つても言い逃れと思われるだけかもしれない。

「いつ、封印するんですか？」

「居所がわからんでな。まあ、そのうちに探し出す」
よかつた。まあ、今、目の前にいるのにわからないくらいなら見つかることもないだろつ。

今井は老人のベットを見た、本がたくさん置いてあつてとても病人には見えない。

「どこがお悪いんですか？」

「血圧が高くてな。いや、その人の話を聞いたんで、ナキータがここに来そうな予感がして。無理いつて同じ病室にしてもうつたんじ

や

「ナキータがここにですか？」

今、来てますよと言いたかつたが、それはこらえた。

「ああ、わしはナキータとは親しいんじや、ナキータが来たらその人を元に戻すように頼んであげるよ」

うそをつくな、親しいんなら今ナキータが目の前にいるのがわかるはずだろう。

「お願ひします」

話を合わせておいた。

「あんたの彼は、検査ではどこも異常は見つからないそうだ。魂を吸うわれたんじやからな、そうだと思います」

「そなんですか」

健康は問題ないらしい少し安心した。後は魂を扱う妖術をどこかで教えてもらうだけだ。

「そうだ、あんたの彼な、その人も法力を持っている」

「えつ、俺・・・、彼が法力を？」

「そうだ、それもかなり強いやつをな」

俺が法力を持つているなんて驚きだ。

「その人、元気になつたら、私たちの仲間になるといい」

「あの、法力があると何ができるんですか？」

「何もできん。ただ妖怪と戦えるだけじや」

看護婦さんが入ってきた。今井は立ち上がりつてお礼を言った。

「あんたの彼の身体を拭くんじや、外に出ていた方がいい」

老人が説明してくれた。看護婦さんが拭くのはちょっと恥ずかしい。

「それじゃ、私はこれで」

今井は頭を下げて病室から出た。部屋の入り口で名前を確認した。老人の名前は『沖田』だった。

6・法力使い

ゾーディヤは夕食後は本を読むのが日課だった。特に用がないときは自分の部屋で本を読んで過ごしていた。そして今井もゾーディヤと一緒にいた。本心は1人で自分の部屋にいたかったが、一緒にいた方がゾーディヤが喜ぶと思ってゾーディヤの部屋で一緒に本を読んでいた。

しかし、今日は、昼間の沖田さんの話が気になっていた。

「ゾーディヤ、私がここにいても法力使いは危険なの？」

ゾーディヤは顔を上げた。

「何を心配してんのだ？」

「あたし封印を破つて逃げ出したでしょう。法力使いは私を追いかけていないのかと思つて」

ゾーディヤの顔が急に険しくなった。

「確かに、そうだ」

「ここにいれば大丈夫よね」

ゾーディヤは深刻な顔して考えている。

「もし、やつらがもう一度封印するつもりなら・・・」

ゾーディヤはその考えを振り払うように頭を振つた。

「大丈夫だ、そこまでしつこくないよ。逃げた事にも気がついていない」

「逃げたことに気がついているよ」

「気がついていることは間違いない。

「大丈夫だ、気にするな」

そう言わると逆に気になつてきた。

「ここにいても、安全じゃないの？」

「ああ、やつらが法力で襲つてきたり、向こうの世界に引きずり出され封印されてしまう」

そうなのか、今井はだんだん怖くなつてきた。

「でも、居場所が見つからないと大丈夫なんでしょう?」「

ゾージャは心配そうな顔をしている。

「やつらが、本気で探せばそのつち見つかる」

「見つかったら、どうなるの?」

「探していないよ、心配するな」

探しているのは間違いのだ。では封印されてしまう。

「封印されたら、どうなるの?」

ゾージャは辛そうな顔をしている。

「その話はやめよう」

「教えて、どうなるの?」

「この前のは偶然で、普通は死ぬまで封印される」

「いやよ、ぜつたい、いや」

あんな狭い穴の中に死ぬまでいるなんて。考えるだけでも恐ろしい。

「ゾージャ、どうすればいいの?」

「だから、探していないって」

「探してるわよ。法力と戦うにはどうすればいいか教えて」「探していいなって」

ゾージャは頑なに首を振る。

「ゾージャ、お願い、法力との戦い方を教えて」

「法力に抵抗する方法はないんだ」

「そんなバカな、封印されてしまう。」

「でも、今までは、大丈夫だったんでしょ」

「それは、人間を襲つてするのが君だと人間に分からなかつたからなんだ」

「そうなのか、ナキータだと分かつてゐる今、ナキータの逃げ道はないのだ。」

「ゾージャ、助けて、封印されるの絶対にいや」

今井は本気でゾージャに抱きついた。

ゾージャはナキータをやさしく抱きしめてくれる。

「心配ないって、探していないよ」

このままでは封印されてしまう。法力でなんとかする以外にない。最初からあきらめるなんてできない、絶対に戦つてみせる、俺には法力がある、法力で戦おう。

今井は今日から法力の練習をするつもりだった、しかし、どうやつて法力の使い方を会得するかまったく当てがなかつた。

次に日、今井は自分の部屋でのんびりしていた。すると、窓からコツコツと音がする。窓に行つてみると、この前、ナキータを襲つてきた男が宙に浮いてこっちを見ていた。ミニーの話ではマドラーードとか言つ名前でナキータの公然の浮氣の相手らしい。

ナキータの恋人ならナキータの気持ちを無視して今井が勝手に冷たくするのもどうかと思えた。それにうまく対応しないと決闘騒ぎになつても困る。

今井は扉を開けてテラスに出た、マドラーードはテラスに降りてきた。

「ナキータ、記憶がないんだって」

今井はうなずいた。

「それで、この前は俺を怖がつて逃げたんだ、理由がわかつてよかつたよ」

「マドラーード、わたし、何も覚えていないの。だから、あなたは、まるで始めて会う人と同じなの」

できるだけ傷つけずに断らなければならない。

「あなたとどんな話をしたのか、あなたとどこへいったのか、まったく何も覚えていない、だから今までのようにはいかないの」

マドラーードの目を見つめた。彼は、ナキータの目を避けて下を向いた。

「君の気持ちはわかるよ。封印されたのも大変だつたし、記憶がないんじゃ不安だよな

「『めんなさい』

低姿勢でともかく断り通すしかない。

「このまま、ゾージャと所にいるつもりか？」

今井はうなずいた。

「ゾージャのやつ、とんでもない奴だな。君の記憶がない事をいい

ことに。君を自分のものにして……。君はもうゾージャとは分かれるところだつたんだ」

「そうなのかもしないが、もうしかたがないのだ。

「私、記憶がないから、誰かに頼りざるを得ないの。わかつて

「ゾージャより俺の方がましだと思うがな」

「今、ゾージャの所にいるから、そのままの方がいい」

これが、最初にマダリードに見つかっていればマダリードの所に

住むことになつただろう。

彼は残念そうだ。

「私たち、これで終わりにしましよう」

彼の顔を見て、できるだけやせこく言へ。

「わかつた、身を引くよ。ただ、君はかならずゾージャが嫌いになる、ゾージャの本性がわかつたら喧嘩が始まるとと思うよ。記憶をなくす前の君がしたことと同じ事を君はもう一回する」

彼はナキータの両肩を持つた。

「その時は俺がいることを覚えていてくれ、俺は君のために命をかけられる」

ナキータはもう死んでいないのだ、彼がナキータを引きずつたら

氣の毒だ。

「私のことは忘れて」

「忘れられるわけないだろう」

「私はいなくなつたと思って、封印されて死んだって

「ここにいるじゃないか」

「ここにいるのは偽者なんだ。

「もう一度とあなたを好きになることはありえないの、ナキータはいないんだから」

彼は不思議そうにナキータを見つめる。

ナキータは彼の手をそつとさわつた。

「さよなら」

彼はナキータをしばらく見ていた。そして決心したのがテラスの

端へ歩いていく。

「魂を食べるのはやめろよ」

「わかった、もう食べない」

「君の妖力は他の事に使うんだ」

「他のこと?」

「彼は今にも飛びたちそつだつた。

「他のことって、なに?」

「彼はテラスの端に立つたまま振り向いた。

「君の魂の妖力は強力だから武器になる。うまく使えば男と勝負して勝てると思うよ」

「男に勝てる?」

「いつも言つてたじやないか、女は損だつて。でも君は男と同じことができるかも知れない」

「なんの話しかわからないが、でも、ひょとして彼に頼めば魂を扱う妖術を教えてくれるかも知れない。

「ゾージャは魂を扱う妖術を教えてくれないの。教えてくれる?」

「妖術が使えないのか?」

「妖術の使いかたも忘れてているの、だから今練習中」

「で、魂を扱う妖術を習いたいのか?」

「もちろん魂を食べるためじやない。一番得意な妖術なのに使えるないのは悔しくて」

「彼は戻ってきた。

「かまわないけど」

ナキータの部屋で妖術の練習をした。

マドラードは丁寧に教えてくれた。彼を練習台にして魂を少し吸い出すこともやってみた。吸い出すだけで口の中にはいれない。魂の扱い方が分かつてきた。

「君の魂の妖術は桁外れに強力だから武器になる、ヤバい時はこれを使うといい、君のこの妖術を防げる奴はまずいない」

彼は重要な事を教えてくれた。これを知っていたおかげで今後助かることになった。

「次は、魂を体から体に移す妖術を教えてくれる？」
「いいよ肝心の妖術を教えてもらえる。

しかし、マドラーードは考へている。

「それは、かなり難しい。十分に魂が扱えるようになつてからがいい」

「大丈夫よ」

「危険なんだ、自分の体から魂を出して、うまく相手に入らなかつたら、死んでしまう」

危険なのはわかる。しかし、なんとか教えてもらわなければならない。

「やり方だけでも、教えて」

「それは、今度にしよう」

彼は教えてくれそうにない、あとちょっととの事。

「お願い」

今井は必死にマドラーードの目を見つめた。

「魂を扱う練習をする方が先だ」

絶対に教えてもらわなければならぬ。こつなつたら、どんな犠牲を払つてもいい。

「もし、教えてくれたら……」

今井はちらつとベットを見た。

ナキータの言つた意味が通じなかつたのか、マドラーードはけげんな顔をしている。

「誰か、体を乗つ取りたい人がいるの？」

彼の表情は急に冷たくなつてきた。ナキータが何を考えているか探つてゐる。

やりすぎると、今井のことがバレるとまづい。

「わかつたわ。じゃあ、今度教えて」

確かにそうかもしけない。彼が危険と言つなら危険なのだらう。

まず魂を扱う妖術の練習が先だ。

「今度、ねずみを持ってきてあげよう。ねずみで練習するといい

彼はテラスへ出た。

「今度は俺のうちへ来いよ。そこで練習しよう

マドリードを断るつもりが、とんでもないことになってしまった。これでは浮気の続きが始まってしまう。こんなことをするんじゃなかつた。後悔してももう遅かった。まあいい、なんとかなるだろう。今井は持ち前の図太さであまり気にしないことにした。

それから数日が過ぎた。

今井は毎日新しい着物を着ていた、ナキータが持っている着物はものすごい量あるから、毎日新しいもの着ても全部着るのは1年はかかりそうだった。ゾージャはものすごい金持ちなのだ。そしてナキータはそれをいいことに贅沢三昧をしていたみたいだ。こんなに着物を買うなんてゾージャの家計にどの程度の負担になっているのだろう。今井の育った家庭は裕福ではなかつた。欲しいものがあつても我慢するのが当然だつた。

ところが、その日は、ゾージャが馴染みの呉服屋を連れてきた。

「ナキータ。君がいつも着物を買つているノリタさんだ」

ノリタさんはナキータの部屋に入ると丁寧に頭を下げた。

「ご無沙汰しております。封印された時は心配しておりました」

彼は持つてきた大きな箱を床に下ろした。

「記憶をなくされたとか、さぞや大変かと存じます。でもお元気そ
うで安心しました」

今井はなんと対応したらしいかわからない、かすかに会釈した。

「さて、今日は新しい着物をお持ちしました」

彼は箱から着物を取り出して、それをベットに広げた。確かに綺麗だ。裾が大きく広がつた華やかなデザインでこれを着たらナキータはすいぶんとかわいくなるだろう。

「いかがですか、綺麗でしょう。ナキータ様がお召しになれば、さ
ぞやお美しいと存じます」

確かに綺麗だが、すいぶんと高いんじゃないだろうか。

今井が黙つていると。彼はにこやかに笑いながら、もう一着広げた。これも綺麗だ。柄がいい。

「これなどはいかがでしょうか、すばらしい一品だと存じますが

「どう、これなんか?」

ゾージャが嬉しそうに聞く。

「これ高いんでしょ？」

「気にするな。一着買ってもいいぞ」

ナキータがたくさん着物を持っているのは、ナキータだけが悪い訳でもなさそうだ。ゾージャはナキータの気を引きたくて彼女の大好きな着物を買ってやっていたのだろう。特に浮気騒動があるから今はナキータの機嫌を取つておきたいのだ。

「高そうだから、ちょっと・・・」

今井はミラーを見た。彼女は無表情で少し離れて立つていて。彼女はこんな着物を一着でも持つているんだろうか。

「遠慮するなよ」

ゾージャは嬉しそうに勧める。

「ゾージャ、納戸の中見たことある。着物がもつ置くところがないくらいあるのよ」

「そりゃいかんな。半分捨てたらどうだ」

ゾージャはかなり感覚が違う。

ナキータがもじもじしていると、ノリタさんはもう一着広げた。これは綺麗だ。華麗でふわっとしていて実にいい。こんなを着たらどんなに楽しいだろう。かわいいナキータがもつとかわいくなる。これは欲しい。

ナキータの顔に出た表情をゾージャは見逃さなかつた。

「これをもらおう」

ゾージャはノリタさんに注文する。

今井は迷つた。確かにこれは欲しい。しかし俺は男なのになぜこんなものが欲しいんだろう。それに買つべきじゃない。あんなに着物があるのに。

「ゾージャ、いいわ、いらない」

ゾージャは戸惑つていて。

「遠慮するなよ、欲しいんだろう」

今井は欲しい気持ちもあつた、迷つていると。

「3着全部もらおつ」

ゾーラは3着とも買つてしまつた。

ノリタさんは丁寧に頭を下げる。こんな高い着物をゾーラに買わせるなんて、俺は悪妻かもしない。

今井はノリタさんが何か書類を書いているのを待つていたが、さつきから指の先がピリピリしていた。
なんだろうと思つていたが、だんだんひどくなる。手足が動かしにくい。

ねばねばした糸が体中に巻きつくなじだ。手足が思うように動かない。

「ゾーラ。私、なにか変。病気みたい」

「どうしたの？」

「なにか。こう糸が絡まつてくるみたいなの」

「糸？」

ゾーラはけげんな顔をしてくる。

今井は頑張つてみるが、どんどん手足が動かしにくくなる。
「絶対、なにか変」

ゾーラはだんだん深刻な顔になつてきた。

「法力かもしけない」

「法力ならどうしたらいいの？」

「がんばるんだ」

法力使いがナキータの居場所を見つけ封印を始めたのだ。

「がんばるつて、どうがんばるの？」

ゾーラは動搖している。あせつているのがわかるが、何もできないのだ。

「ナキータ」

彼はナキータを抱きしめた。

「ごめん。ナキータ」

「封印されるのは、いや、助けて」

ゾージャはナキータを強く抱きしめた。しかし、糸はぐんぐん締まつてくる。

まったく身動きできなくなってきた。息をするのもきつい。

「ごめん。ナキータ。ごめん」

ゾージャは涙声だ。これがゾージャとの別れになるのだろうか。あの狭い穴が脳裏に浮かんで恐怖が身体を走った。あそこに死ぬまで封印される。自分は人間だと言つても信じてくれないだろう。今井は歯をくいしばつた。負けてたまるか。ナキータに襲われた時のこと思い出した。あの時みたいに戦えбаい。

突然、あの時ナキータが法力と言つたのを思い出した。あの時法力を使つたのだ。あのやり方でやればいい。目をつぶり精神を集中して襲つてくる力に対抗した。攻撃している相手の感触があつた。そこへ向けて精神を集中する。相手の心の揺れが伝わつてくる。マードードに習つた通りに魂を探りにかかつた。相手の魂に触れた。ナキータの中で何かが動いた。魂に反応してナキータのもつとも得意とする妖術が動きだした。相手の魂を吸い出す。魂はどんどん吸い出され口の中に入ってきた。えもいわれぬおいしさだ。恍惚感のなか、魂が胃の中に入つていく。

ハッと我に帰つた。人の魂を食べている。あわてて吐き出した。食べてしまつた魂はそのまま口の中に残つた。魂の味にしばらく動けなかつた。

手を動かしてみた。普通に動く。糸はもうなくなつていた。相手の法力使いは魂を吸い出されて倒れたのだ。

「勝つたみたい」

「えつ」

ゾージャはナキータを抱きしめる手を緩めた。

「勝つたよ」

ゾージャは呆然としている。

「ゾージャもう大丈夫よ、法力使いはやつつけた」

「君が法力に勝つたの？」

ナキータはにっこり笑った。

「そうよ」

ゾージャは大喜びだ。がばっとナキータを抱きしめた。

「よかつた。よかつた。もうだめかと思つた。君すごいよ」

ゾージャに抱かれながら、今井は舌を動かしていた。口の中に魂のおいしい味が残っている。氣味が悪い。自分がどんどんナキータになつてしまつ。

今井は一人で自分の部屋にいた。疲れたと言つて一人にしてもらつた。

この戦いは今井にとつてはかなりの衝撃だった。

人を殺したかもしれない。相手の法力使いはどうなつただろう。どのくらい魂を食べたら人間は死ぬのだろうか。

それに、魂のおいしさもショックだつた。あれなら我慢できないのも分かる。

どんどん自分がナキータ化している。ひょっとしたら自分も我慢できなくなるかもしれない。

戦いの興奮がまだ納まつていなかつた。顔がほつてていて目が痛む。

今井は頭を冷やすためにテラスの椅子にすわつて、冷たい風にあたつて心を落ち着けた。

ミリーがテラスにやつてきた。

「お飲み物をお持ちしました。お酒でも飲まれると落ち着くと思います」

ミリーは本当に気が利く。

今井はグラスを取つて少し飲んでみた。かなり強いお酒で口の中の魂の味を消してくれる。

「私がお邪魔でしたら、すぐ下がります」

「いえ、ここにいて」

ミリーがいた方が落ち着く。ミリーはなぜか心の支えになるのだ。

「ミリー、魂を食べたことある？」

いきなりとんでもないことを聞いてみた。

「いえ、ありませんけど」

「すいへ、おいしかった。信じられないくらい
ミリミリがついた。」

アーヴィングの「鬼の島」

「私が、なぜ魂を食べるのをやめられたのかが分かった
「気になさらなくて結構だと思います。今のナキータ様は以前とぜ
んぜん違います」

ミツーは慰めてくれる。

「妖怪とはそもそもそうしたものです。妖怪は人間の邪念が具象化したものと言われています。妖怪はこの世の苦悩や悔恨を背負つて生きていく運命なのです。悩む必要はありません。強く生きてください」

今井は「リーを見上げた。それを吹き込んでくれるような日だ。

なぜか、ミリーのそばにいると落ち着く。
ミリーはナキータが落ち着くと部屋を出ていった。

ナキータが法使いに勝ったという話はたちまち広がつていつた。

次に日、今井が部屋のいると窓から「んーん」と音がする。マドラードだ。窓を見ると彼が宙に浮いてこちらをみてくる。今日は「そははつきりと断らなければならぬ。ゾーディアが見たら浮氣と思つだろうから見つかつたら大変なことになる。

籠をもつてゐる。

「ほり、ねずみだ」

彼は籠を差し出した。しかし、今井は手を出さなかつた。

「マドラー。わざわざありがとうございます。でも、私たちの関係は終わりにしましょう。私、ゾージャを裏切るわけにいかないの。今の私に

は、安定して生活が絶対に必要な。だから、ゾージャを頼るしかない。わかつて」

マドラーードは籠を差し出したまま、にこやかな顔をしている。

「私、記憶をなくした時はどうしたらいいかまったく分からなかつたの、もしそんな時に、あなたに先に会つていたら、今頃あなたの家にいるかもしれない。でも、ゾージャが来てくれたの。だから・・・

・

「マドラーードはナキータの言葉を遮つた。

「魂を移動させる妖術が知りたいんだろ。ほら、ねずみは2匹いる。教えてやるよ」

籠を見ると、中にはねずみが一匹いる。思わず興味を引かれたが、思いとどまつた。ゾージャに頼めばいい。魂を吸い出す妖術をすでに知つてゐる事をゾージャに説明すれば、移動の妖術はゾージャが教えてくれるかもしれない。だから、マドラーードに聞く必要はないのだ。

「マドラーード、私、真剣なの。もうこんな関係を続けたくない」

「ゾージャを、当てにしているのなら、無駄だとと思うよ。彼は教えてくれない、現に教えてくれなかつたんだろ?」

彼はナキータの両肩を持つた。

「誰の体を乗つ取りたいのか知らないが、それは君にとつて絶対に必要なことなんだろう。死ぬ危険があつても構わないくらい。だったら俺が教えてやるよ。俺は理由なんかきかない。君が必要としているなら、俺が力になる」

理由も聞かず教えてくれる。これは魅力だった、ゾージャなら絶対に何に必要なのか聞かれるだろう。

マドラーードはナキータの手をつかんだ。

「こいよ、教えてやる」

彼は、扉を開けるとナキータを引っ張つて部屋の中に入った。

「マドラーード、困るわ」

彼は籠をテーブルの上に置いた。

「ここつで、魂の移動をやつて見よつ」

マドラーードは説明を始めた。今井はやはり知りたかった。いつしかマドラーードの手ほどきを受けていた。

「じゃあ、やつてみて

ねじみの魂をもう一匂に移す練習をやつてみる。

一匂にねずみから魂を吸い出す。ねずみの口から細い糸のような魂が出てきた。それをもう一匂のねずみの口へ入れる。糸のような魂は宙をふわふわして弾うようにいかない。

「早く入れて」

マドラーードが言う。

あせるがうまく入らない。そのうち魂は湯気のように立ち昇り始め、そして陽炎のように消えてしまった。ねずみは死んでいた。

今井は頭を抱えてしまった。

「あせるな、これは難しいんだ。またねずみを持ってきてやるよ」不意に、マドラーードがナキータを抱きしめた。あまりに急で避けることができなかつた。

「君が好きなんだ。愛している」

今井は彼から離れようと彼の体を押すが押し戻せない。

彼はキスをした。濃厚なキスでうつとりするような快感が押し寄せてきた。ゾージャの時は気持ち悪かつただけなのに。必死で彼の体を押すが手に力が入らない。

彼に抱き上げられ、ベッドに倒された。彼が上にのしかかっていく。まずい、逃げようともがくが彼はナキータを離さない。彼はナキータの体をさわりはじめた。

今井はナドラーードが言つた言葉を思い出した『ヤバい時は魂の妖術を使うといい』。そうだ、俺にはこれがある。今井はマドラーードの魂を吸い始めた。

「なに」

彼は一瞬声を出しだが、すぐに氣を失つてナキータの上に崩れ落ちてきた。

今井は、すぐに魂を戻すと、彼をどかして立ち上がった。
マドラーもすぐに意識を取り戻した。

「マドラー、なにするの、やめてよ」

動搖していくどんな口調でいつたらいいか分からなかつた。

「出て行つて

マドラーはベットの上で体を起こした。

「わるかった。しかし、君はこの前、教えてくれたら・・・と言つていただろう」「うう

そうか、確かにこの前はそんな事を口走つてしまつた。しかし、今はすこし事情が違う。今井は黙つて立つていた。

マドラーはじつとナキータを見ていたが「わかった」と言つて立ち上がるテラスへ出た。

「また、ねずみを持つてきてあげるよ」

彼はどこか楽しそうに言つた。

「だめ、もう会うべきじゃない。これで終わりにして「もう、これ以上彼を引きずるべきじゃない、きつぱり終わりにしなければならない。

「さつきは悪かった。君を見ていたらむりむりとして」

彼は微笑んだ。綺麗な目をしている。

「俺は見返りを期待して君に妖術を教えているんじゃない。君が必要としているから教えているんだ。見返りなんか必要ない。君が俺を必要としている限り、俺は何でもするよ」

彼は数歩離れた。

「また、ねずみを持つてくる

そう言つと飛び上がつていった。

ここにはゴルガという領主がいて、このあたり一帯を支配していた。ゴルガは大変な権力を持つていて、彼に逆らうものはいなかつた。ゾーディヤはゴルガの家臣で、ゾーディヤがこのようないい暮らしができるのもゴルガの家臣だつたからだ。

ナキータが法力使いに勝つたという話はゴルガの所に伝わつた。そのゴルガの所からゾーディヤの所へ使者がやつてきた。ゴルガ様が呼んでいるからすぐに行くようにとのことだつた。

すぐに出かけなければならない、家の中はちょっとした騒ぎになつた。

「すぐ、正装をお持ちします」

ミリーが素早く部屋を出ていった。彼女は気が利く。

ゴルガに会うためには正装が必要らしい、今井には何が何やらさっぱり分からぬ、

「ゴルガって、だれ？」

ゾーディヤに聞いてみた。

「ゴルガさまはこのあたりの領主。俺たちの主になる。偉い妖怪だ」ミリーがすぐに正装の着物を持ってきてゾーディヤに渡した。

ゾーディヤはミリーがいるのに着替えを始めた。しかも、ミリーがゾーディヤの横について着替えを手伝う。確かに正装は一人で着るのは大変みたいた。

今井は何をどうしていいか分からぬから横に立つて着替えを見ていた。

ミリーが着替えをかいがいしく手伝う。ゾーディヤは着替えながらミリーを見つめていた。

今井はどうしようもない無力感に襲われた。自分には何もできない。だからミリーが手伝うしかないのだ、分かっていても落ち着かない。

「はい」

ミリーが最後に飾りの短刀を渡す。ゾージャは笑顔でそれを受け取ると腰に差した。

着替えが終わった。なるほど正装は立派に見える。ゾージャじゃないみたいだ。

「いつてくる」

玄関でゾージャは一人に向かってそう言つたが、なぜかミリーに言つてゐるようだに感じた。

ナキータとミリーはゾージャの帰りを待つていた。

この家には使用人が3人いる。一人は料理人で料理専門、もう一人はゾージャの近侍でコドニラ、そしてナキータの侍女のミリーだ。コドニラは中年の男性で背が高い。ゾージャの着替えはコドニラの仕事になる。しかし、ミリーは賢くて気がきく。使用人に上下はないのだが実質ミリーが取り仕切つていた。

今井はさつきのことが気になつてしかたがなかつた。なぜかミリーに嫉妬を感じる。ミリーはナキータがいない3年間ゾージャのそばにいたのだ。何があつたかわかりやしない。そう思うといらしくてくる。

今井はミリーを冷たい目で見た。

「ミリー、ゾージャの侍女はコドニラじゃないの？」

ミリーは、ぱっと立ち上がつた。

「すみません、わたしやりきました」

ミリーは驚くほど氣を使うのだ。

「コドニラは気が利かないし。ナキータさまではお手伝いは無理かと思つて。私がやりました。でも、やりすぎでした。申し訳ありませんでした」

「いえ、そういう意味で言つたんじゃないの。ただ、コドニラはなにしてると思つて」

「申し訳ありませんでした」

ミリーは深く頭を下げる。

「今後、あのよつな、でしゃばつたまねは決していたしません。すみませんでした」

「いえ、そういうんじゃないんだけど」

ミリーは固くなつて顔を伏せて立つてゐる。

自分はどうかしている。ミリーはなにも悪くないのに、怒るなら気が利かないゴドーラを怒るべきなのだ。

「ミリー、『めんなさい』。私なにも出来ないもんだから自分があがいなくて。それでつー」

「いえ、ナキータ様のお氣持ちも考へないで、悪かったと思つてします。お許しください」

それでもミリーへの嫉妬はおさまらなかつた。なにか変だ、ナキータが自分の感情の中に入つてきている。

ゾーディヤが帰つてきた。

普段着に着替える。

ミリーが普段着を持つてきて、今度はナキータに渡した。さつきのはそういう意味ではなかつたのだが。

しかたないので、今井が着替えを手伝つ。ミリーはナキータを補佐してくれるが何をどうしたらいいのかわからない。どたばたしながら普段着に着替えた。

ゾーディヤがナキータの耳元で

「なにかあつたのか?」

「いえ、べつに」

着替えが終わつた。

ゾーディヤは椅子に座つた。

「で、お呼び出しほ、何だつたんです?」

ゾーディヤはうれしそうだ。

「ナキータ、お前の噂がゴルガ様のところまで届いていてな、話を聞きたいそつだ」

「何の噂です？」

「もちろん法力使いと戦つて勝つた話だ」

ゾーニャが言いふらしているのか、この噂かなり広がっているらしい。

「ゴルガ様の所へ行くんですか」

「あす、来て欲しいそうだ」

次の日。ゾーニャとナキータ、ニニーの3人はゴルガの屋敷に行つた。

ゴルガの屋敷はゾーニャの屋敷など比べ物ならないくらいに大きかった。山の中腹を削り取つて平地にしてそこに幾つものお屋敷が建つていた。巨大な門や玄関前の広大なテラスなど、ここに来る者を圧倒する。屋根の瓦、建物の柱、壁の板に打つてある釘、どれを見てもビックリするくらい大きくて立派だ。中の廊下は広く、大勢の妖怪が忙しそうに行き来している。開いた扉から見える部屋はこれまで広く立派で、豪華な家具が置いてあり、廊下には大きな壺や、見上げるほど大きい石の飾りが置いてある。

ゴルガに会うのも大変だつた。延々と色んな所を通り抜け、あちらこちらの部屋で待たされて、案内する担当の妖怪も数回入れ替わり、豪華な部屋に通されて、やつとゴルガに会うことができた。

ゴルガは太つた中年の男で脂ぎつた顔をしている。目は鋭くて怖い。

「お前がナキータか」

ゴルガは正面の一段高くなつた所に座つている。

「はい」

今井は元氣よく答えた。

「おお、かわいいのう。ゾーニャは幸せものじやな。記憶をなくしておるそつじやのう。大変じやな」

「ありがとうございます。なんとか暮らしております」

「とぎに、ナキータ。そなたは法力使いと戦つて勝つたそつじやの

「はい」

「おお、すばらしい。頼もしいかぎりじゃ。詳しく話してはくれぬか」

妖怪は法力にはかなわない。だから、ゴルガはなぜ法力に勝てたのかが知りたいのだ。理由は今井が法力を持っているからなのだが、これは言えない。だから、戦いの過程をそのまま説明した。

ゴルガは話を聞きながらうれしそうだ。

「実にすばらしい。ナキータそなたは天才じゃ。わが妖怪の救世主じゃ。で、なぜ勝てたと思う?」

「多分、私の推測では、私の魂を扱う妖力が強かつたからだと思います。私のこの妖力は法力に封じられませんでした」

ゴルガは身体を乗り出した。

「素晴らしい。法力に封じられぬ妖力があるとは。われら妖怪が数千年苦しんできたことがこれで解決する」

妖怪には法力使いとの積年の因縁があるみたいだ。それが妖怪の勝利の形で終わると思っている。

「ゾーディヤ。ナキータに我が家臣に戦い方を指導をさせてもらいたい」

ゴルガはゾーディヤに指示した。

ゾーディヤは頭をさげる。

「家臣が法力使いと戦えるようになつたら、もう人間など恐れる必要はなくなる。ナキータ。さればそなたも人間の魂など食い放題じゃ。すばらしいとは思わんか」

とんでもない話になってきた。

「これは素質が必要だと思われます。素質があるかどうかわかりません」

今井はあわてて、その計画は無理だと説明を始めた。ナキータが勝てたのは今井の法力があつたからだ。

しかし、ゴルガはその言葉をさえぎった。

「法力使いのやりようはひどすぎる。今では妖怪世界にいても封印

される者がでておる。妖怪世界にいても安全ではなくなつたのぢや。しかも死ぬまで封印するのはひどすぎる。ナキータ、そなたが一番封印のひどさを知つておろうが。あまりにも残酷だ

今井はナキータがいた穴を思い浮かべた。立つこともできないような小さな穴なのだ。そこに死ぬまで封印される。

「ゾーディヤ、そなたの俸禄を上げよう。500巻だ」

ゾーディヤが驚きの声を出した。彼を見ると田を丸くしている。

「ははあ、有難うございます」

ゾーディヤは頭を下げた。

今井はまだ引き受けたと言つていないので、それになんで自分にではなくてゾーディヤの俸禄が上がるんだ。

「ゾーディヤ、家臣の練習の計画を立案せい」

「はい、承知しました」

ゾーディヤはナキータの意向を無視して引き受けてしまつ。

「あの、私はまだ引き受けたとは言つて……」

今井は言いかけたが、ミリーが袖をグイと引っ張つた。

「ダメです」

ミリーが小さな声で言ひ。

食事をじこ馳走してもらえたことになつた。別の部屋に食事が準備してあつた。

ゴルガが席が正面にあり。その左右に20人くらいの家臣が座る。2人は一番末席に座つた。みんな ゾーディヤより偉い家臣ばかりなのだ。

ゴルガが来るまで、しばらく待つていた。

法力にたいする戦いの訓練の教育は無理だ。だからこれは引き受けべきじやない。引き受けたと出来なかつたときにはまずいことになる。だから断つとしたのに、それなのに、ゾーディヤが勝つてに話を決めてしまうなんて。

「ゾーディヤ、これは引き受けちゃダメよ

「「リガ様に頼まれたら断れるわけないだろ?」

「「」の件は私が一番よく知っているのよ、断ろうとしたのに」

「無理でもやらなくちゃ、俸禄500巻をもらつたろ。すうじや

ないか」

「それは、ゾーディの俸禄でしょ。私はどうなるのよ

今井は不満でしようがない。

「同じことぢやないか」

「同じぢやないでしよう。あたしの功績なのよ

「俺の禄が500巻になつたら、君も贅沢できるぢやないか」

「あたしの禄が500巻になつたら、ゾーディにも贅沢させてあげるわ」

「君の言つてることはおかしいよ。そんな話、聞いたことがない

「今、聞いているでしょ」

今井は次第に腹がたつてきた。

「ナキータ様」

ミリーが割つて入つた。

「ナキータ様は人間の女性のよつた事をおしゃつていいんですか?」

「人間の女性?」

「私もよく思つことがあるんですが、人間の女性は男性と同じだそうです。女性でも家臣になつて俸禄をもらつことができるやうです。うらやましいとります」

「そうなのか、なんとなくわかった。女性差別があるのだ。女性は男性の付属物とみなされていいるのかもしねない。

今井はこの問題は妥協することにした。妖怪世界の女性差別問題に首をつこんでもしようがない。

「ゾーディ、この教育は無理じやないかと思つ。素質が必要なの」

「それはあるだろ? だから素質のあるやつを探せばいい」

「引き受けても結果を出せないと思つ。だから、出来ないことを前提に話を進めて」

「大丈夫さ。500巻だよ。がんばれよ」

ゾージャは500巻の俸祿になにも見えなくなっているみたいだ。
もし、出来なかつた時の事を考えて欲しいんだが。

ゴルガが来て、食事になつた。

偉い人の前なので、みんな緊張している。ゴルガは対法力戦部隊の構想について長い演説をしていた。

今井はお腹をすかして目の前のおいしそうな食事を眺めていた。

何人かが入れ替わり話をする。

そして、やつと食事になつた。

酒が出され、場は賑やかになつてきた。

しばらくすると先ほどの緊張はうそのようになり、みんな大いに盛り上がつた。何人かはナキータの所へきて法力使いとの戦いの話を聞いていた。

「ナキータ、こっちへ来て酌でもせんか」

突然、ゴルガから声がかかつた。

あわてて、今井はゾージャを見た。彼は顔を動かして行けと言う。酌なんてどうすればいいかまったく分からぬ。なんとかゾージャに断つてもらおうとゾージャの袖を引っ張つたが、彼は厳しい顔をしている。

仕方なくのろのろと立ち上がると、ゴルガの所へ行つた。でもどうしていいかわからない。

世話係の家臣が椅子をゴルガの横に置いたので、そこに座つた。横にあつたトックリを持つてゴルガの盃にお酒を注いだ。

「ナキータ、お前はかわいいなあ。ほれ、お前ものめ」

ゴルガはナキータに盃を持たせて、それに酒を注ぐ。そしてナキータの腰に手を回ってきてグッと引き寄せた。

これはセクハラだ。手で押し戻そうとするがすごい力だ。助けを求めてゾージャを見た。しかし、ゾージャは黙つている。

ともかくやり過ごすしかない。今井はしかたなく注がれたお酒を飲んだ。

「うまいか？ほれ、もつとのめ」
ゴルガの手はだんだんと上がってきて胸の近くにきた。胸を触る。

「ゴルガ様ちょっと」
もがくが手を緩めない。ゾーリヤを見たがゾーリヤは下を向いていてこっちを見ようとしない。

さつきの俸禄のことといいこのセクハラといい頭にくる。思い切って言つてみることにした。

「ゴルガ様、お願ひがあります」

「なんだ」

「対法力戦の指導をしますから、私に禄をください」

ゴルガは大笑いをした。

「女に禄だと、おもしろい」とを言つやつだ

「禄をくれないのなら指導はお断りします」

一瞬、場が静になつた。みんながギョッとしたようにナキータを見ている。言つてはいけない言葉だつたのだろうか。

しかし、ここまで来たら後に下がれない。

「法力との戦い方を知つてるのは私です。戦い方を知りたかつたら私に禄を払つてください」

ゴルガの顔がみるみる険しくなつた。

「わしに逆らうつもりか」

ゴルガが手を離したので、今井はゴルガから離れた。

「禄を私にと言つてはいるだけです」

「ふざけるな。女だからとやさしくすれば、のぼせやがつて」

ゴルガはナキータを睨みつける。そしてゾーリヤに向かつて。

「ゾーリヤ、さつきの500巻は取り消しだ。いいか、対法力部隊を養成するんだ。出来上がつたら500巻にしてやる

やつぱり、報酬の話はゾーリヤにする。

「ゾーリヤにいくら払おうと払つまいと何の関係もないことです。

この私に、禄を払わなかつたら指導しません」

息が荒くなつていた。呼吸するのが苦しいくらいだつた。
ゴルガはあぜんとしている。

「ゾージャ」

ゴルガはゾージャを怒鳴りつけた。

「はい」

ゾージャは飛び上がるよう立つた。

「お前の女房の指導はなつとらん。もつと、ものの道理を教えとけ
「はい、わかりました」

「わかつたら、帰れ」

ゴルガが言う

「さつさと帰れ」

ゴルガは瘤瘍をおこして怒鳴つた。

食事は中止になり、そのまま帰つてきた。

ゾージャは機嫌が悪い。

「ナキータ。なんであんな事を言つたんだよ。氣でも狂つたのか
「指導するのは私なのよ、私が禄をもらつべきだわ」
「女は禄なんかもらえないの、わからないのかなあ
「ゾージャも女は男の持ち物と思っているの」

今井はなぜか腹がたつ。

「だいだい、私がゴルガに捕まつてピンチの時になぜ助けてくれないのよ」

「どうしようもないだろ、相手はゴルガだぞ」

「ゴルガに土下座でもなんでもしてやめてくれと頼んでくれてもいい

いはずよ」

「そんなこと出来るはずないだろ」

「どうしてよ」

彼の言つていることもわからないではない。しかし、どこかふが

いなく感じる。だいだい自分の女房が他の男に触られているのに黙

つているなんて。

しかし、喧嘩してもはまじまらない。それに自分はナキータじゃないのだからこの喧嘩はどうかおかしい。

「頭を冷やして、あした話し合いましょう」

「そうだな、俺は明日謝りに行つてくる」

「そうね、その方がいいかも」

「その時は指導するつて約束してもいいが」

仕方ないだろ？ 無理言つてもこの習慣は変えられるはずはないのだ。

「いいわ。ただ、本当にこれは指導は無理なの。だから結果がでないかもしれないって念を押してね」

今井は自分の部屋に戻つて來た。今日は大変な一日だった。

ミラーが入つてきた。

「お着替えを持つてきました」

ミラーは着替えをベットに置くと。

「今日のナキータ様は本当に素晴らしいしかつたと思ひます。私、胸のつかえが取れました。

ナキータ様が自分に禄をよこせとおつしやた時、私は感激しました。本当に感激です。ナキータ様はお強いんですね」

「ちょっと言ひ過ぎたと思つてゐるの。ゾージャに迷惑をかけたかもしれない」

「そんなことありません。あんなふうに言わないと女はいつまでたつても弱いままです」

「ミラー、ありがと。あなたにわづひ言つてもひつと、安心できるわ

ミラーに着替えを手伝つてもらつて布団に入つた。

ゾージャと喧嘩するくらいにここに慣れた。でも、このままナキータになつてしまふのじゃないかと思つと怖かつた。

結局。ゾージャは出来上がつたら増禄になることで、法力と戦う

部隊の養成をすることになった。

次の日。マドラーードがやつてきた。

彼は断つても断つてもやつてくる、今井も根負けして彼を部屋の中に入れた。

彼は、ねずみがたくさん入った籠をテーブルに置いた。

「これだけねずみを捕まえるのは大変だつた」

「どこで、捕まえてるの？」

「人間界。穀物倉庫の中にはねずみがたくさんいるんだ」

マドラーードはナキータのためのここまでしてくれるのだ。彼とどう付き合つか考えてしまう。

彼はナキータを楽しそうに見ている。

「今日の君は綺麗だ」

ナキータはこの前ゾージャに買つてもらつた着物を着ていた。褒められて思わず微笑んでしまう。

「これ、新しく買ったの」

「よく似合つてゐる、君は何を着ても上手に着こなすね」

着こなしてなんかいない、ナキータは何を着ても似合つうのだ。マドラーと話しているといふと楽しい。今井はすっかりゾージャが今家にいることを忘れていた。

突然、扉が開いてゾージャが入つてきた。彼とマドラーードと田が合つた。

ゾージャは驚愕の表情で一人を見ている。

マドラーードが頻繁にくるので不用心になつていて。ついに見つかってしまった。大喧嘩になつてしまふ、決闘になるかもしれない。ゾージャは凍りついたように一人を見ていたが、何を思ったのか、扉を締めて出ていった。

「ゾージャ」

今井はあわててゾージャの後を追つた。なぜ、ゾージャが出てい

つたのか分からぬが彼に謝らなくては。

「ゾージャ、誤解よ。なにもしていない」

ゾージャは足早に歩いて行く。

「ゾージャ、待って」

ゾージャの袖をつかんで懸命に引っ張った。彼に悪いことをした
という思いでいっぱいだった。

「ゾージャ、悪かったわ。あやまる」

「もう、いいよ、1人してくれ」

「ゾージャ、誤解よ、彼に魂の妖術を教えてもらつていただけ。ゾ
ージャが教えてくれないから」

彼は後ろを向いたまま立ち止まつた。

「言わなかつたけど、君はマドラードが好きなんだ。俺とはもう終
わつていた」

「マドラードから聞いたわ。詳しきはミリーか」

彼は悲しそうな目でナキータを見た。

「俺は、君が記憶をなくした事をいいことに、君を騙したんだ・・・

。卑怯な男だ」

「マドラードは断つたわ。今のは、本当に妖術を教えてもらつてい
ただけ」

「断つた?」

ゾージャが不思議そうな顔をしている。

「本当よ、だから、彼とはなんでもない」

「それは、いけないよ。俺は君を騙していたんだ。本当は君は俺が
嫌いなんだ」

本当のナキータはそうだったのかもしれないが今井にはなぜかゾ
ージャが好きだった。いい奴だ。

「ゾージャ、好きだよ」

彼は戸惑っている。

「俺は君を自分のものにするために、君を騙すような男だぞ。そん
な奴が好きなはずないだろ?」

「俺は君を自分のものにするために、君を騙すような男だぞ。そん
な奴が好きなはずないだろ?」

ゾージャには昔のナキータとの喧嘩の傷があるので。事実が分かればナキータが自分を嫌いになると思っている。

「ゾージャ、自信を持つて。私、ゾージャが好きよ」

自分はナキータではないのだから言い方が難しい。愛してるとは言えない。ただ、ゾージャとこれまでのような関係を続けていきたかった。

「ナキータ」

彼は目に涙をいっぱいにためていて。嬉しそうだ。こぼれ落ちる涙を拭っていたが。ふと、彼はナキータの後ろを見た。誰かいるみたいだ。

振り向くと、マドラードがいた。

「立ち聞きするつもりはなかつた。君がゾージャに殴られるんじゃないかと思つて追つてきたんだ」

彼はゾージャにちょっと会釈すると、廊下を帰つていく。

今井は彼の後ろ姿を見送つていた。自分が優柔不斷のために彼にも迷惑をかけた。彼を気持ちを利用して彼を都合のいいように使つてしまつた。俺つてひどい悪女だ。

数日がたつた、

今井は自分の体の様子を見に行くことにした。できれば攻撃してきた相手の事も知りたかった。

人間の女の服に着替えた。

スカートをはくのは女装をしているようでどきどきする。着替えが終わると鏡を見た。スカート姿もいい。ナキータは何を着ても似合つ。

外は珍しく曇つていた。ここは晴れている日が多いのだ。

病院へ着くと病室へ行つた。

相変わらず同じ状態だった。自分の身体はチューブを鼻に通して眠つている。

自分の身体の横にすわつて眠つている自分を見た。少し痩せたよ

うにも見える。床擦れなどは大丈夫なのだろうか。

「那人、相変わらずだねえ」

隣のベットの沖田さんが声をかけた。

「そうですねえ」

まずは氣のない返事をした。しかし、先日の法力使いとの戦いの状況が知りたい。それとなく法力使いにの話にもつていった。

「そうだ、ナキータ退治作戦はどうでした？」

「ナキータは思いのほか手強い妖怪じゃ。返り討ちにあつた」

「えつ」

驚いたふりをする。

「一人殺された」

「ええ、殺られつたつて、死んだんですか？」

「いや。ただ。左足が動かなくなつてな。今入院中だ」

「左足が？」

「よかつた。死んでいなかつたんだ。でも魂を一部食べると体の一部が動かなくなるらしい。」

「今度はもつと大勢で攻撃をかける計画じゃ。今、人を集めている一瞬、魂の味を思い出した。攻撃を受ければまた魂が食えるかもしれない。そんな思いが頭をよぎる。恐ろしい考え方だ。あわつてその思いを吹き払つた。

「そこまでして殺らなければならぬんですか？」

「絶対にナキータは封印する。あいつは許せんのじゃ」

「ナキータはよほど恨まれているらしい。」

「いつまで封印するんですか？」

「もちろん死ぬまでじゃよ」

「死ぬまで、なぜすぐに殺さないんですか？」

「妖怪を殺しても、その死体から新しい妖怪が出てくるんじゃ。封印して妖力を全部使いきらせると妖怪は消滅してしまう」

「そうなんですか。でもそれって残酷じやないですか」

沖田はわらつた。

「妖怪じゃぞ。残酷なことがあるもんか」

今井はあの狭い穴に死ぬまで閉じ込められると思った時の恐怖を思い出した。

「妖怪だつてかわいそうです」

「人間を殺してその魂を食べるような奴じゃぞ。あなたの彼氏だつてそいつに殺されたんだ。それなのにかわいそうだと思うのかね「ナキータだつて悪氣があるわけじゃない。魂がこんなにおいしいんなら我慢できないのも無理はない。今井は思わずそう考えてしまつた。

「残酷な殺し方には反対です」

「どこが残酷なんじゃ」

「あんな狭い穴の中で過ごさなきやいけないんですよ」

「妖怪が苦しむことはない。自然に消えるように消滅するだけだ」
勝手な考え方だ。妖怪の事を知らないからそんなことが言えるのだ。

自分は人間の味方なのか妖怪の味方なのか分からなくなつた。今、妖怪と人間が戦争を始めたらどちらにつくだろう。人間につくと言える自信はなかつた。

その日の夜。今井はベットの上で横になつて眠ろうとしていた。すると、指先がぴりぴりする。法力の攻撃だ。

今井は緊張した。大丈夫だとは思うが、今度は相手だつて今井の反撃を防ぐ方法を考えたはずだ。

すぐに戦闘体制に入る。精神を集中し法力を遡つて相手の様子を探る。

法力を使つた戦いはこれで3回目だ。法力の使い方は格段に上達していた。自由に法力を使うことができる。簡単に相手の様子がつかめた。相手は30人くらいいる。それが同時に法力で攻撃をかけてきていた。躊躇していたら封印されてしまつた今すぐ殺される。全力で戦わなければならぬ。相手を殺すかもしれないが止む得ない

い。が、内心は魂を食べる口実ができた事を喜んでいた。

すぐに相手の魂を探つた。相手は何も対策を講じてなく簡単に魂に触れた。すぐに吸い出す。たくさんの魂が吸い出されてきた。口の中に甘い味が広がる。えもいわれぬ恍惚感。ここまでおいしいとは。人間の魂が胃の中に入つていい。今井は我を忘れ魂を食べるのに夢中になつてしまつた。

突然、法力使いと繋がつっていた法力の回路が切れた。

魂も来なくなり、今井は魂が食べれなくなつた。やつと正氣に戻つた。

方法は分からぬが、ナキータに逆襲されたら法力の回路を遮断する準備をしていたのだろう。それで切れてしまつたのだ。

正氣に戻ると、急に自分が恐ろしくなつた、今度は自分ではやめられなかつた。もし、回路が切られなかつたら全部食べてしまつただろう、30人殺すところだつた。

魂を食べ始めると自分じやなくなり、ナキータの本性に取り付かれてしまつ。

自分が止められなくなりそうだ、魂 食べたさに人間を襲うかもしれない。

しかも、人間の法力使いもナキータにかなわない、法力が使えるから妖怪もかなわない、誰も手出しできない化け物が出来かかつているのかもしねり。

次は間違いなく相手を殺すだろう、これ以上魂を食べてはいけない、食べる度に化け物になつていく。

法力使いに会つて話がしたかつた、今井はもう魂を食べるつもりはないのだから話せばわかってくれるかもしれない、でもどうやつて会うか、沖田さんでは自分の体が心配なので危険な話は持ち込めない。

ふと、法力使いに会う方法を思いついた。会えるかもしれない。

次の日。今井は人間界に向かつた。今日はナキータとして人間に

会うつもりだから妖怪とわかるように妖怪の着物をきた。

人間界に着くと携帯電話のスイッチを入れてニュースのサイトを見てみた。『宗教的儀式の最中に集団麻痺』の見出しがあった。これだ。30人も麻痺がおこつて病院に運ばれたらニュースになるはずだ。

記事では死者はいないらしい。とりあえず安心する。搬送された病院が書いてあつたので、そこへ行つてみた。病院の前は取材の車やパトカーが駐まつていて、受付で病室を聞いても教えてくれなかつた、しかし、記者や警察が出入りしている病室を探せばいい。

それらしい病室があつた。明らかに警察と思えるような険しい顔をした人が数人病室から出ていた。その病室に入つてみた。

6人部屋なので誰が法使いか分からぬ。しかし、法使いなら今ナキータが着ている着物が妖怪の着物だとわかるはずだ。ぐるつと見回した。一人の男と目があつた。彼はナキータを見て驚いている。

今井はその男のベットの横に行つた。彼は恐怖の目でナキータを見つめベットの端へ逃げるようにもがいている。

「ナキータです」

今井は言つた。

彼は口をぱくぱくしているが言葉にならない。

「話し合いにきました」

「殺さないで」

彼はかすれた声でやつと言つた。

「そちらが何もしなければ、私も何もしません。法使いの方ですか？」

彼はかすかにうなずいた。

「怖がらないでください。私は何もしません」

ナキータがそんなに怖いんだろうか。彼女はどんな悪行を働いたのだろう。

「あなたは、法使いの中で責任ある立場に人ですか？」

「いや。私は、応援を頼まれただけだ」
できれば責任者と話したいが、意向を伝えるだけなら彼でもいいだろう。

「では、責任者に伝えていただきたいのですが、休戦を申し入れます。私は今後人間を襲いません。そちらも私を攻撃しない。この条件で休戦しませんか」

彼はナキータを見つめている。少し落ち着いたようだ。

「休戦ですか？」

「そうです」

「しかし。あなたが、人間を襲わないという保証がない」

「休戦だから、そのような保証はありません。どちらかが約束を破れば再び戦いになるだけです」

「なぜ、休戦したいんです？」

「私はもう人間の魂は食べないと誓つたんです。でもこれ以上食べたらその誓いを守れそうにないんです」

彼にどんな風に話すか考えた。少し脅す方がいい。

「もう誰もわたしを止めることができません。止めてているのは唯一わたしの理性だけです。でも、これ以上、魂を食べるとその理性が崩壊しそうなんです。わたしの理性が崩壊したら、わたしは殺戮の限りを尽くすでしょう。それが怖いんです」

彼は落ち着いて話を聞いていた。しつかりした人らしい。

「妖怪とこうやって話せるなんて思っていませんでした。ましてナキータと・・・いやナキータさんと話すことがあるなんて夢にも思いませんでした。わかりました。伝えておきます」

「あした。結果を聞きにここへきます」

わかつてくれたみたいだ。これで、法使いとの戦いはなくなるだろう、一安心だ。

今井は人目につかないところから青空に向かつて飛び出した。

次の日、今井は休戦の確認に人間界へ行つた。

病院に着いたが、警察の車がたくさん来ている、廊下を病室へ向かつたが人が誰も歩いていない、異様な緊張があつた。

罠なのかもしない、そう思つたが、しかし、昨日のあの人は妖怪と話し合ひができる事がわかつたはずだ、待ち伏せなどしているはずがない、少なくとも話だけは聞いてくれるはずだ、そう思つて廊下を進んだ。

昨日の病室の前まで来た。突然身体に糸が絡みついてきた、法力の攻撃だ。やつぱり待ち伏せだつたのだ、そんな卑怯な。

今井はその場に座つた、精神を集中する、だが距離が近いせいか法力の攻撃は強かつた、糸が急激に絡みついてくる、あつと言つ間に息ができなくなつた。

今井は懸命に相手の魂をさぐつた、しかし、頑強にガードしてて魂に触れない。

負けるかもしれない、あの狭い穴が一瞬脳裏をよぎつた。

恐怖を感じたら精神力の戦いは負けだ。今井はそんな考えを振り払い魂を吸うことにして集中した。魂を食べるとの思いが体の中から何かを引き出した、強力な妖力が魂を吸い始めた、彼らのガードは簡単に壊れ、魂が吸い出されてきた。魂の味が口の中に広がる、ものすごい恍惚感が今井を襲つた、今井は完全に自制を失い魂をむさぼり食つ。

突然、頭を殴られ廊下に転がつた。魂を食べるのは中断されてしまった。

見上げると、モップ棒を構えた男が目の前に立つていた。精神を集中するため目をつぶつていたので男に気がつかなかつたのだ。

「Jの野郎」

今井は魂を食べるのを中断され激しい怒りがこみ上げてきた、こいつの魂を食つてやる。魂を吸おうとしたが思うように精神が集中できない。もう一発モップ棒で殴られた。

今井は立ち上がるうとしたが、体がしびれて思うように動かない。さつきの法力の攻撃で思つたよりダメージを受けているのだ。ま

すい、今、法使いの新手が来たら対抗できない、すぐに逃げなければあぶない。

今井はよろよろと立ち上がり、モップの男がこれ以上追つてこないよう睨みつける。

モップ男から離れて窓を開けた。空を飛ぶのも難しそうだった、しかし飛べなかつたら終わりだ。

渾身の力を集中して宙に浮いた、窓から外へ出て、よろよろと飛んで逃げた。

モップ男の魂が食えなかつたことが腹立たしかつた、誰でもいい、力を回復したら食つてやる。

ともかく安全な場所で休憩しなくては、今井はそう思った。

今井は病院から離れた森の中で座つて休憩していた。しびれも取れ体力も回復していた。

時間がたつたので魂を食べることへの呪縛はなくなつていた。

今回もあるの男が殴つてくれたからよかつたが、自分で自制できない、一旦魂を食べ始めたらもうやめられない、どのくらい魂を食えばやめられるのだろうか、まったくわからない。化け物が出来かかっている。

今井は元の体に魂を戻す事を考えていた。

魂を扱う妖術は難しい。まだ練習不足だった。しかも、自分の魂をナキータの体から出せるのかわからない。魂を移す相手なしに魂を出せば死んでしまうから一度もやつたことがなかった。しかし、やつてみるしかない。うまくだせなかつたら、妖怪世界に戻つて研究しなおせばいいだけだ。しくじつて死ぬかもしれないが、いつまでも怖がつてはいられない。

しかし、これではゾージャにきちんと別れを告げられない。いつ、うまくいくか分からないのでゾージャには何も話せないからだ。ナキータが急にいなくなるとゾージャは心配するだろなと思うと心が痛んだ。

ゾージャがゴルガの所から帰つてきた。呼び出されて行つていたのだ。

正装なので普段着に着替えなければならない。

ミリーが着替えをナキータに渡すので、しかたなく着替えを手伝つた。

今では着物の着方を覚えたので着替えを手伝うことができる。今井のナキータはだんだんいい奥さんになつていく。

ゾージャは渋い顔をしている。ゴルガの所で何かあつたらしい。夕食の時もゾージャは一言も喋らない。ほとんど何もたべずに考えている。今井は尋ねてみたがゾージャは返事を濁す。よほど困つたことがあつたみたいだ。

やがて、彼は意を決したようにナキータを見た。そして、重い口を開いた。

「お前を・・・差し出せと言われた」

一瞬、意味がわからなかつた。

「ゴルガに君を献上しなければならない」
まさか、そんなバカな。

「私を、品物みたいに差し出すつて」と?「

ゾージャは力なく肩を落とした。

妖怪世界はそこまでひどいのか。

「そんな事つて、普通にあることなの?」
彼は下を向いている。

「いやよ。絶対にいや」

これだけは受け入れられない。品物みたいにゴルガに渡されるなんて「冗談じゃない。

「ゾージャ。いやよ。あたし絶対にいや
彼は哀れな顔をしている。

「ゾージャはどうするつもり?」

何も言わない。

「どうするつもり。私を渡すつもり?」
しばらく返事を待つたが、ゾージャは虚ろな目をしたままだ。

「はつきつしてよ。どうするつもり?」

「どうしようもない」

ゾージャは小さな声でいった。

「断つたらどうなるの?」

今井はゾージャがはつきりしないのでいらっしゃってました。

「たぶん。殺される」

そこまで横暴なのか、無茶苦茶な社会だ。

「じゃあ、逃げたら

「どこへ?」

「この男。確かにふがいない。私を愛しているだろ?。だったら逃げようと黙つべきだ。

「どこへでも。ゴルガの手の届かないところへ」

「生活はどうする」

今井はあきれてへたりこんでしまった。たぶんゴルガに渡されて

しまつ。

でも、それは好都合でもあつた。元の身体に戻るつもりだから、どうせゾージャと分かれなければならない。「ゴルガの所からいなくなればゾージャがナキータの行方を心配することもなくなる。

ゾージャはテーブルに突つ伏して動かない。たぶん泣いているのだろう。

自分の妻より生活の方が大事なのか。
しばらくゾージャのそばにいたが。立ち上がると自分の部屋に帰つてきた。

今井はこれから計画を考えていた。

絶好の機会だ。ゴルガに献上されたらすぐに魂を戻してみよう。相手がゴルガならナキータが急にいなくなつても氣の毒に思う必要はない。うまく戻せなかつた時はゴルガの女になつて何度もやってみればいいだけだ。考えてみればゾージャだつて同じことだ。ここで生きていくためにゾージャの女になつているのだ。献上はいつ頃だろう。いよいよここともお別れだ。

ミリーが部屋に入つてきた。

「ナキータ様。お話は聞きました。本当にひどい話です。ナキータ様がお可愛そうです」

ミリーは目に涙を浮かべている。

彼女は本当にいい妖怪だ。心から心配してくれる。

「ゾージャ様は逃げようとは言つてくれないのでですか？」

今井は首をふつた。

「自分の妻より生活の方が大事みたい」

「なんということを。ゾージャ様がそうおっしゃつたんですか」

今井はぶすつとしてうなずいた。

「ナキータ様」

ミリーが抱きついてきた。ミリーに同情されるのは悪い気持ちは

しない。

「ナキータ様がお氣の毒です。逃げましょ。私お供します」

ミリーの方がよほど氣骨がある。

しかし。今、逃げるとゾージャが居場所を知つていると疑われるだろ。彼には世話になつたから、迷惑がかからぬようにしなければと思つた。

「逃げると、ゾージャが疑われるわ」

「そこまで、ゾージャ様のことを」

ミリーは泣き崩れた。

「ナキータ様。では、どうされるのですか?」

「ゴルガのところへ行く」

「それはいけません。あまりにお可哀想です」

「ゴルガの女になるわけじゃない。ゴルガの所へ行つてから逃げる」
「でも、ゴルガの所からは簡単には逃げられません」

監禁されるかもしれない。しかし、一時的に人間界まで行ければいいだけだ。

「大丈夫。逃げて見せる」

「私もお供します。私の命にかけてお逃しいたします」

ミリーはすごい事を言つ。本気なんだろうか。

「ありがとうございます。でも、そこまでしなくていいわ

「いえ、私がかならずお逃しいたします」

ミリーはまじめすぎるのだろう。しかし、このぶんだとミリーはゴルガの所へついてくる。それではミリーと別れる時にややこしいことになる。

「ミリー。ゴルガの所へは私一人でいくわ」

ミリーは驚いている。

「なぜですか?」

「ゴルガの所よ。しかもそこから逃げるのよ。危険だわ。あなたを巻き添えにはできない」

「そんな。私のことなど気になさらないでください。逃げる時には

私の助けがいるはずです」

「あなたにも生活があるわ。私と来たらどうするつもり？」
自分は人間に戻るのだからいいが。ミリーは一人でゴルガに追われる身になつてしまつ。

「ナキータ様だって同じでしょ。私がお助けします」

ミリーは自分の信念を絶対に曲げようとしない。連れていいくしかなさそうだつた。
ゾーディヤと少し話をしたかつたが、彼は部屋にやつてこない。こんな重大事を妻と話し合おうと思わないのか、今井は少し腹がたつた。

次の日。食堂に行くとゾーディヤが昨日のテーブルの所で眠つていた。一晩中ここにいたらしい。

「ゾーディヤ、こんな所で寝ていると風ひくわよ」

ゾーディヤを振り起こした。

彼はぐしゃぐしゃの顔をしている。

「逃げよう」

彼は突然そう言つた。

今井は驚いた。計画が狂つてしまつ。しかし、彼が一晩中考えて出した結論だろ。彼の気持ちを大事にしたかつた。

「ありがとう。逃げてくれるの」

ナキータはにっこりわらつた。

「西の国へ逃げよう。あそこならゴルガの力が及ばない」
ナキータはうなずいた。

しかし。今井は困つていた。

すぐにナキータはいなくなるのだ。ゾーディヤにナキータのために人生を棒にふらせるのも可哀想だ。

「ゾーディヤ。ごめんね。ゾーディヤが築き上げた今の地位がダメになるね」

「そんなんかまわないよ」

「昨夜ね。私は私で決心したの。もし、私がゴルガの所へ行けばゾージャが今まで通りの暮らしができるなら、私はそれでいいよ」「そんなことさせないよ」

「わたしね。ゴルガの所に行つてもかまわない」

後ろからすすり泣く声がした。振り向くとミリーが立つていた。いつの間にか彼女が来ていたのだ。ミリーは完全に誤解したみたいだ。

「君にそんなことはさせられない。一緒に逃げよう」

ゾージャは真剣だ。彼も覚悟を決めたらしい。自分の愛する女性を他人に差し出すなど出来ないとわかつたみたいだ。

しかし、これではゾージャの人生が台無しになる。もう、本当のことを言つしかない。ナキータはすでにいない事を説明して逃避行をやめさせなければならない。

今井は朝食を食べながら、どう言つか考えていた。ナキータが既に死んでいることを知った時のゾージャの反応が心配だ。たぶん荒れ狂うだろう。彼と戦うことになるかもしれない。法力を使えるので負けることはないだろうがかなり面倒だ。ミリーの反応も気になる。ナキータにあれだけ忠実なのだから命がけで向かつてくるだろう。

ゾージャの事をいろいろ言つたが自分もいざとなつたら、なかなか言い出せない、朝食が終わつたら話そう。

朝食が終わつて居間のソファーに一人で座つた。

「ゾージャ・・・」と言出しかかつた時に。

「ナキータ

とゾージャが言い出した。

「さつきの話だけど、君はゴルガの所に行つてかまわないのか?」

ゾージャは決心が鈍っているのだ。

ナキータは黙つてうなずいた。

「現実的に考えて、逃げたらどうしていいか見当もつかないんだ。

生きて行けないかもしない」

「逃げたら、ゴルガからも逃げなきゃならない」

「そうだ、絶対に刺客が追つてくる」

「だから、私、決心したの。私が行けばすべてつかまへ取まるんだって」

「ゴルガだぞ、いいのか」

「かまわないわ」

彼は必死でナキータを見つめている。

「すまない、本当に申し訳ない」

彼は床に土下座して頭を下げた。

確かにゾージャの言う通りかもしない。このよつた事が現実に我が身に降りかかった時、すべてを捨てて逃げることが本当に出来るだろうか。

「ゾージャ、気にしないで、私は大丈夫よ

「すまない、俺がふがいなくて」

ナキータはゾージャを抱きしめた。彼の罪悪感を少しでも減らしてやりたかった。

ゴルガへの献上は明日になるとのことだった。

12・売り飛ばされる

その日の晩すきにゴルガの所から使者が来た。

ナキータの荷物を運ぶと言つ。必要最小限の品々しか持つていけないとの説明だ。ミリーが品物を選んでくれている。

使者の中にマドラードがいた。彼はナキータが人から離れたのを見計らかつてやつてきた。

「ひどい事になつたな」

今井は黙つていた。

「ゾージャと逃げるのか？」

ゴルガの使者にそんな事が言えるはずがない、黙つていた。

「ゾージャには逃げる度胸なんかないな。ゴルガの所へ行つてくれと頼まれたんだろう」

ゾージャを非難して自分を売り込む魂胆だ。今井は彼を避けて歩き出した。しかし、マドラードはついてくる。

「俺と逃げないか。俺はどこへ行つてもやつていける自信がある。

君に惨めな生活はさせない」

今井はいらいらしてきた。

「マドラード、私たちは終わりにしましょつて、この前言つたはずよ」

「君がそこまでゾージャにつくすとは意外だな。君はゾージャに売り飛ばされるんだぞ」

「売り飛ばす？」

「そうか、ゾージャが話してゐはずないな。君をゴルガに献上する」と500巻の増禄になるんだ」

これにはさすがの今井もショックだつた。

「ゾージャはその増禄を断らなかつたの？」

「あいつが断るもんか、大喜びだよ」

これが本当ならゾージャはとんでもない奴だ。増禄は自分の妻を

売るのと同じじゃないか。確かめる必要がある。

今井はゾージャを探して歩き始めた。マドリードはついてこなかつた。

ゾージャはいたが、ミリーがゾージャを怒鳴つている。

ゾージャは椅子に座つてうなだれていて、ミリーはゾージャの前に立つて金切り声上げてゾージャを罵つていた。

「ミリー、どうしたの？」

「ゾージャ様はやつぱりナキータ様を差し出すそつです。さつきは逃げるとおっしゃつていたのにです」

ミリーは泣きそつだ。

「ミリー、そういう話になつたの」

「なぜですか、絶対にいけません」

「ミリー、仕方のないことなの」

今井はゾージャを見た。

「ところで、ゾージャ、500巻の増禄になるつてほんと？」

ゾージャは顔を上げない。

「本当なの？」

彼は力なくうなずく。

「なぜ、断らなかつたの？」

彼は顔を上げた。

「わかつた、断る」

もう遅いだろう、その場で断らなきや意味がない。

「ナキータ様を渡して、ご自分は増禄になるんですか」

ミリーが金切り声を上げた。

ミリーはゾージャを罵倒し始めた。

ゾージャを罵倒するのはミリーに任せて、今井は一人になれる部屋を探した。

ゾージャは何を考えているのだろう、それほどナキータを愛していたわけじゃなかつたのか、それとも単純に物事がわからないだけ

なかもしれない。

もし、これが本物のナキータだつたらどう考えただろうか、もちろんマドラーと逃げるだろうな。

ゾージャのために氣を使って損をした氣分だ。
あした、ゴルガの所へいく、ちょうどいい潮時かもしれない。

その日は、ばたばたと過ぎた。ゾージャとの最後の日なのにほとんど話さなかつた。

夕食が終わると、ゾージャは自分の部屋に戻つて行つたが、今井はやはり氣になつた。お世話になつたお礼が言いたかつた。

ゾージャの部屋に行つた。

「ゾージャ、入つていい」

ゾージャは本を読んでいた。ナキータは彼の横にすわつた。

「ゾージャ、私は記憶を失つてから後のことしか知らないんだけど、ゾージャにはいろいろ教えてもらつて、感謝しています」

ゾージャは色々してくれた。ゾージャに悔いが残らないようにしてあげたかつた。

「ナキータ、すまなかつた。禄をもらつたのは間違いだつた」

「もう、そんなことはいいわ」

「禄なんか欲しくなかつたんだ。ただ禄をやると言われた時、断りにくかつたんだ」

「わかるわ、もう氣にしなくていいよ。まつたく何とも思つていな
い」

「俺はバカだよな」

「今日はゾージャと最後の日よ」

計画がうまく行けば、もうゾージャと会つことはないだろう。
「記憶を失つて、始めてここに連れてこられた時は怖かつたわ」

「君はガチガチだつた」

「始めて宙に浮けた時はうれしかつたわ」

「あの時は楽しかつた」

「鬼ごっこしたね」

ゾーラが目に涙が浮かんだ。

「君を失いたくない」

ゾーラが悪いわけじゃない、ただゴルガに逆らえないだけなのだ。

「これは運命なの、しかたないことだわ」

「ナキータ」

彼はナキータを抱きしめた。

ナキータはゾーラが納得がいくまで抱かれていた。

「ゾーラ、私はゾーラだけのものよ」

ゾーラは抱いた手にぐつと力を入れた、息ができないくらい強く抱きしめられた。

「私は、未来永劫ゾーラだけのものよ」

しばらくナキータを抱きしめていたが、彼は手を離した。

「ゾーラ、愛してる」

ナキータはゾーラにキスをした。

二人だけの時をすごした。永遠とも思える時間が流れた。

ナキータは最後にもう一度キスをした。

「もう、会うことはないと思うわ」

ナキータは立ち上がった。そして部屋を出るため扉を開けた。

「あしたは慌しいから、ゆっくり話せないと思う、だから今言つとくね。

・・・・・ やょうなら

扉を閉めるとゾーラの部屋を後にした。

ゾーラは世話をなつた・・・これが俺からのプレゼントだ。

次の日。今井はミリーに晴れ着を着せてもらつた。

ゴルガの所から輿が迎えていた。

時間になるとミリーと玄関に向かつた。玄関の外のテラスには大勢のゴルガの家臣が立つて、その中を輿に向かつて進む、輿の

前にはゾージャがいた。

「さよなら」

ナキータは静かに言った。

「すまん、許してくれ」

「ゾージャのせいじやないわ、運命なの」

ナキータは輿に載つた。屋根がある輿で、すだれからゾージャが見えた。

「出発」

責任者が号令を出した。

輿がすうと飛び上がつた。ゾージャが小さくなつていぐ。

ゴルガの屋敷ではナキータの部屋だという所へ通された。

ここは、屋敷は大きいが、建物がたくさん建つてるので、窓からは隣の建物しか見えない。景色としては最低だ。部屋の大きさ豪華さはゾージャの家と比べ物にならない。

部屋数も多く、侍女も数人いた。

しかし、部屋には結界が張つてあつた。監禁するつもりだ。

監禁されると困る。ここを抜け出して自分の体の所へ行けなくなる。しかし、逃げるとミリーがゴルガに追われることになる。

しかたない、ちょっと危険だが正々堂々と出て行くことにした。ゴルガに戦いを挑むのだ。法力が使えるから多分勝てるだろう。妖怪は法力には勝てないはずだ。ゴルガを倒してここを出て行く。もし負けてもゴルガの女になればいいだけだ。

ゴルガがすぐにくることで、椅子に座つて待つていた。

部屋の端に衝立に隠れるようにして、鎖で繫がれたみすぼらしい服装の男女が数人立つていた。なんでナキータの部屋に繫いであるんだろう、ここは牢獄と兼用になつているのだろうか。

しばらく待つているとゴルガがやってきた。家臣が数人ついて来ていた。

彼はゆつたりした着物を着ていて、太つた体を隠している。

「ナキータ、よくきたな」

ゴルガは、にたりと笑うと椅子にどかっと座った。

「ゾージャと引き離して悪かった。でも、怒つておるであらうな

「もちろんです」

今井は立つたまま、ゴルガを睨みつけていた。

「まあ、座れ」

「いえ、こののままで結構です」

彼はナキータを眺めている。

「わしは、お前のような女が大好きだ。かわいくて、頭がよくて、気が強い、しかも強いときている……」

「私は、あなたの女になるつもりはありません」

今井はゴルガの言葉を遮った。

「お前が簡単にわしの女になどなるはずがないと思つとるよ」

彼はナキータの体を上から下までゆっくりと見ている。

「だがな、お前をなんとしても手にいれる——。考えてみろ、わしの所にいればなんでも思いのままじゃ。たとえば、魂の練習用に何人でも準備するぞ」

ゴルガは部屋の隅で鎖に繋いである男女を見た。

「こいつらは練習に使つていい。死んでしまつたら、また次を準備する。ねずみより生きた妖怪の方が練習になるぞ」

ゴルガは恐ろしい奴だ、人の命をなんと思っているんだろう。たぶん、マドラードから聞いてそれで準備していたのだろう。

「部屋も、もつといい部屋を準備しよう、ここには景色が見えん。着物も欲しいだけ買つていい」

それでナキータのご機嫌を取つてゐるつもりか。

「それでも、私を結界で閉じ込めておくんですね」

ゴルガは口を開けたまま、しばらくだまつた。

「そうか、まあ、お前が逃げると困るでなー。お前が逃げないと

約束するなら、結界は外す」

「いよいよゴルガに挑戦する。

「もつと簡単に私を入れる方法があります」

「ほう」

ゴルガは身を乗り出した。

「私と勝負をしてください。私と戦つて、あなたが勝つたら、あなたの女になります。従順にお仕えいたします。しかし、もし、私が勝つたら、私を自由にしてください。私はここを出でていきます」

ゴルガはにやつとわらつた。

「おもしろい。お前はたいした女だ。その条件受けた」

ゴルガは立ち上がつた。

「このわしと戦つて勝てると思つてている所がかわいい」

今井はミリーを見た彼女は後ろにいる。ゴルガの攻撃をミリーの分まで防ぐのは無理だ。

「ミリー、横に避けていなさい」

ナキータは身構えた。しばらく緊張が続いた。ゴルガは先に手を出すつもりはないらしい。

今井から動いた。彼は精神を集中して法力の糸を送り出す。ゴルガが妖力を撃つてきた。妖力の盾で防ぐが、吹っ飛ばされた。しかし、転がりながらでも法力は緩めない、糸をぐいぐい締め上げた。ゴルガが動かなくなつた。体を屈めて耐えている。

今井はどんどん糸を送り出して締め上げた。ゴルガはその場に倒れた。

簡単に勝負はついた。妖怪は法力にはかなわないのだ。

ナキータは立ち上がると、ゆっくりとゴルガに向かつて歩いた。

「ゴルガ、もう終わりか」

家臣がぼうぜんとナキータをみている。

ゴルガにとてもかなわないと思わせなければならぬ。

「ふん、口ほどにもない。私が欲しいのだろう。もつとがんばつたらどうだ」

ゴルガの横に立つた。

「たわいのない。それで、この私が欲しいなどと」

今井はゴルガを縛っていた法力を解いた。ゴルガは体を起こし咳き込みながらナキータを見上げた。

「ゴルガ様、わたしの勝ちです。約束どおりここを出ていきます。よろしいですね」

ゴルガはぼうぜんとナキータを見上げている。

ナキータはミリーを見た。

「ミリー、ついて来なさい」

ゴルガが倒れたので結界は消えていた。ナキータは開いていた窓から外へ飛び出した。ミリーも後に続いた。

二人は近くの山の上で休憩した。

「ナキータ様はお強いんですね、感激しました」

今井はわらつた。

「そうでもないよ」

「ゴルガの所に行つても大丈夫と最初から思つてあつたんですか？」

「まあね」

これで、妖怪世界には住む所がなくなつた。食べるものも寝る所もない。今井は自分のアパートに戻るつもりだつた。

「いよいよ、ミリーに本当の事を言わなければならぬ。一番よくしてくれたミリーに一番ひどい事を言つことになる。これだけナキータに忠実なのだから一騒動起つるだろ。ミリーを法力で縛らなければならぬかもしれない。

その後のミリーの生活も心配だつた。また、どこかで働き始めるだろうがその間寝る所もない。一番よくしてくれたミリーに一番ひどいことをしてしまつた。

「ミリー、話したいことがあるの」

「なんですか？」

「落ち着いて最後まで聞いて欲しいの」

今井はすべてを話始めた。

しかし、意外なことにミリーは最後まで聞いてくれた。

「そうだつたんですね。封印後のナキータ様の変わり様は変だと思つていました。それに、記憶がないのに入間の事には詳しかつたり、すべて人間的な考えをされるのも不思議でした」

ミリーはまつたく動じない。

「ミリー、あなた、腹をたてないの？」

「何ですか？」

「私がナキータを殺したのよ」

「あるじが殺されたのに、報復をしようとしたのは、不実だとおつしやるんですか？」

「いえ、まあ、そうね、あなたがかかつてくると思っていたの」「わたし、盲目的に忠実なんじゃありません。ナキータ様は確かにあるじですが、彼女に無条件に仕えるわけじゃありません」

「そうなのか、ミリーは賢いしっかりした妖怪だ。今までミリーは忠実だと思っていたがミリーのは忠誠じやなくて正義感なのかもしれない。」

「わたし、あなたを誤解していた。こんなことならあなたにもつと早く話せばよかつた」

ミリーは考へていて。

「難しいですね。報復まではしませんが、お仕えする」とは出来なかつたと思います」

「使えてくれる必要はないわ。ここに来た時はどんなに心細かつたか。あなたに相談していたら、きっと力になつてくれたと思う」

ミリーは苦笑いをしている。

「それも難しいですね。相談されていたらゾーディヤ様に秘密にはできなかつたと思います」

「結局、今回のやり方が一番よかつたことね」

今井はミリーを見た。彼女のことが心配でならない。

「これから、どうする。私は人間界のわたしの家に戻るつもりなんだけど」

「よかつたら、わたしあ供していいですか？」

よかつた。これでミリーが寝る場所も確保できた。

人間界の自分の家に戻ってきた。一ヶ月ぶりだ。鍵は自分の体を救急車で運んだ時に取り出していて、ずっと持つていた。

玄関を開けると新聞がたくさん積もつていた。新聞を踏み分けながらミリーと一緒に部屋に入った。

ゾーディヤの家の広い部屋になれていてので、ずいぶんと狭く感じる。

「ミリーはゾーラの家のミリーの部屋よりも狭い。」

ミリーが哀れなものを見るような目で今井を見る。

俺はこれでも会社では中堅で結構優秀な社員なんだ。給料も多い方だと思つ。部屋が狭いのは日本に土地がないせいだ。

「ミリー、狭い部屋でごめん」

今井は話し方を男に戻した。今まで女で話していたので変な感じだ。

「いえ、今井様。そんなこと気にしていません」

ミリーは履物を履いたまま、上がつてくる。

「ミリー、履物をそこで脱いで。日本では、部屋の中は裸足なんだ」

「今井様、話し方が変ですね」

「もう、男と分かったから、男に戻したんだ。変かな」

「かなり変です。元の話し方の方が好きです」

しかし、俺は男なのだからこちらの方が自然なんだが。

「この、話し方になれてくれ。この一ヶ月女のふりで大変だったんだ」

ミリーはテーブルの前に座つた。妖怪の着物はドレスのように広がつてるので、椅子に座るのも大変だ。ゾーラの家の椅子はすいぶんと大きかったのだ。

「コーヒー入れてやるよ、飲んだことある?」

「いえ、人間の食べ物は食べたこと、ありません」

「テレビ、見てみようか」

今井はテレビをつけた。

「これは、ぜつたいすごいだろつ。妖怪世界にはテレビがないんで暇つぶしに苦労したんだ」

「それは、羨ましい悩みですね」

今井がコーヒーの準備をしていくと。

「あの、私がやります」と、ミリーがくる。

「いいよ、君はお客様だから、そこでテレビでもみてて」

「いえ、今井様にそんなことはさせられません」

「もう『様』はいいよ、今井と呼んで」

「でも、それはできません」

「もう主従関係じゃない、対等なんだから」

二人でコーヒーを飲みながらテレビを見ていた。久しぶりの我が家

屋だ。

時刻はもう4時を回っていた、考えてみたら今日は昼ご飯も食べていない。

「飯でも食いに行こうか」

「人間の食べ物ですね、食べてみたいです」

窓を開けた。窓から出た方が早い。晴れ着を着ているので移動する度に何かを引っ掛ける。玄関まで行くのは大変だった。すうと窓から外にでた。

近くのレストランに行つた。

ミリーは知的な美人だ、頭もいいし理想的な女性だ。男だとわかつた今ミリーが一緒にいてくれるのは今までと違う意味でうれしい。

「人間界に来たことがある?」

「いえ、始めてです」

「人が多いだろう」

「人間界は男女同権なんですね、いいですねえ」

「ここに住んだら」

「無理です」

「無理じゃないよ、俺が今まで妖怪の世界に住めたんだから君がつてここに住めるよ」

「でも、一ヶ月でここに戻つてきたでしょう」

「ゴルガに献上騒ぎが起きたからだよ」

食事を始めた、ミリーは珍しそうに食べる。

「ナキータ様のこと、かなり前から怪しいなと思つていたんです。

手帳とか変な機械持つてあつたでしょ、しかも肌身離さず持つてありました。ひょっとしたら人間かなと思つていきました

「そうなの、じゃあ、なぜ見逃してくれたの？」

「わかりません、ただ、新しいナキータ様の方がいいかなと思つたんです」

今井の話しが変わったせいかミリーの対応も違つ。ミリーがこんなにかわいいと思つたことはなかつた。

「君がゴルガの所までついてきてうれしかつた。命がけでナキータを守るつもりだつたの？」

「ええ、今でも同じ気持ちです」

「今でも？」

「妖怪は主従関係なんです。あるじを守るのが従者の勤めです」「じゃあ、俺を守ってくれるの？」

「はい」

思わずうれしくなる。

「まだ、元の体に戻る危険な仕事が残つています。それが終わるまでお仕えします」

「元の体に戻つたら、その後は？」

「そこまでです、わたしとナキータ様の主従関係はそこで終わりです」

「俺との関係は？」

ミリーはわらつた。

「」自分でおつしゃたでしょ、対等だと

食事が終わると、二人で少しあるいた。今井は晴れ着を着ているのでかなり目立つ、すれ違う人が振り返つていい。いい臭いがする。

「おいしそうな臭いだな」

「えつ、臭いですか」

「かなり、臭つてるよ」

この臭いが分からぬはずないだろうと思つただが、ミリーには

分からぬいらしい。

臭いが強くなつた。みると1人のおいしそうな人間が買い物をしている。ぱちやとして見るからにおいしそうだ。今井はその人間に見とれていた。

ハット我に返つた。これは人間の魂の臭いなのだ。今まで妖怪世界にいたから気がつかなかつたが、ここは人間界、回りには人間がたくさんいる。

「ミリー、これは魂の臭いだ」

ミリーはビックリしている。

「まずいな、この臭い。がまんできなくなりそうだ」

何か焦燥感みたいなものがこみ上げてくる。

「ミリー、ナキータが魂を食べるのをやめられなかつたのは彼女が悪いんじゃない。正気じやなくなるんだ」

「ナキータ様も、悩んでありました。ただ、何もおっしゃらなかつたのでどうなるのかはわかりませんでした」

ナキータも同じだつたのだ。彼女の身体にいるところの身体の本性に取り付かれてしまう。

「魂を戻そう。もう待てない」

「危険なんでしょ」

「いつかはやらなきや」

二人は人気のないところへ行くと、夕暮れの空に向かつて飛び出した。

した。

病院に着いた。病室に入ると沖田さんが食事をしていた。ナキータとミリーを見てビックリしている。

「あんた、その着物。それ、妖怪の着物じやないか」
始めて着物姿で沖田さんに会つ。

「あんた、まさか・・・」

今井はっこり笑つた。

「自己紹介していませんでしたね、ナキータです」

沖田は飛び上がるほどビックリした、茶碗がひっくり返る、彼はベットの上であわてて身構えた。

「安心してください、何もしません。今までと同じです」

「あなたがナキータだったのか」

今井はうなづく。

「わしは、ここでナキータが来るのをずっと待っていたのに、あんたに気がつかんとは」

沖田さんは呆然としている。

「そうだ、頼まれたんだ。あんた、その人の魂を戻してやつてくれんか」

「今からやります」

今井は自分の身体を見た。いよいよ、この体に戻る。

今井は自分の体の布団をはいでベットに腰を下ろした。

自分の顔にナキータの顔を近づける。ナキータの体から魂を吐き出し始めた。魂はナキータの口から今井の口へ入っていく。魂が出ていくにつれて意識が薄くなつて体の感覚がなくなつてきた。やがて別の感覚がでてくる。目の前にナキータの顔が見えてきた。ナキータの口から自分の口へ魂が入つてくる。始めてじかにナキータを見た。かわいい顔をして晴れ着が似合つている。彼女は今井の上に崩れ落ちてきた。今井は彼女を抱きとめた。魂はどんどん今井の中へ入つてくる。あともう少しだ。今井はナキータを抱きしめた。しつかりしつかり抱きしめた。ナキータの口から魂の最後が細い糸になつて出てきて、それで終わつた。

ナキータの体が飛び散つた。無数の小さな小さな星屑になつて部屋いっぱいに舞い上がつた。キラキラ光りながら消えていく、最後の一つが消えてしまった。

すべて終わつた。

今井は体を起こしてみた。普通に動く。鼻からチューインガムを抜き出した。

ミラーを見た。

「うまくいったみたいですね」

「大丈夫みたいだ」

「わたし、ゾーディヤ様のところへ戻つて、この事を報告します」

今井はうなずいた。

「それがいい」

ミリーは目で挨拶をした。そして病室を出て行こうとする。

「ミリー」

今井は呼び止めた。彼女は振り向く。

「さよなら」

ミリーはにっこりわらつた。

「さよなら・・・ナキータ様」

13・人間界へ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

物語として、おもしろい事をを目指して書いています。まだまだですががんばりたいと思っています。（おもしろかったら評価を入れていただけると励みになります）

この話は、一旦ここで終わりにしましたが、いつか続きを書いてみようと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7696q/>

妖怪の妻になってしまった男

2011年3月4日14時55分発行